

Śūnyasamādhivajra 著作の葬儀マニュアル *Mṛtasugatiniyojana*

— 試訳および註¹ —

種 村 隆 元

はじめに

本論文は『東洋文化研究所紀要』第 163 冊に掲載の筆者による *Mṛtasugatiniyojana* (『死者の良い存在領域への差し向け方』) のサンスクリット語校訂テキスト(種村 2003)にもとづく試訳および註²である³。本論文のタイトルからも明らかのように、*Mṛtasugatiniyojana* は Śūnyasamādhivajra 作の葬儀マニュアルである。その内容の概観およびサンスクリット語写本に関する報告をすでに行っている(種村 2004 及び Tanemura 2007)、本論文で再説することはしないが、その後に明らかになった

¹ 本論文の執筆に関して、科研の葬儀文献研究会において永ノ尾信悟(東京大学東洋文化研究所、科研研究分担者)、苦米地等流(人文情報学研究所)、倉西憲一(大正大学総合仏教研究所)、石井裕(中央大学)の各先生から貴重な御意見を賜った。科研連携研究者の久間泰賢先生(三重大学)には折に触れて貴重なご指摘を賜ってきた。2012 年 12 月にハンブルグ大学において開催された Manuscripta Buddhica Workshop において、Harunaga Isaacson 教授(Universität Hamburg)、Francesco Sferra 教授(Università degli Studi di Napoli "L'Orientale")、Martin Delhey 博士(Universität Hamburg)、Péter-Dániel Szántó 博士(University of Oxford)を始めとした参加者の先生に多くの貴重な御意見を頂いた。執筆の最終段階では久間泰賢、加納和雄(高野山大学)、倉西憲一の各先生に多くの誤りを訂正して頂いた。ここに改めて謝意を表します。(当然のことながら、本論文のいかなる誤りも筆者自身が責任を負うものである。)最後に、本論文の掲載を快諾して下さい望月海慧先生(身延山大学)にこの場を借りて御礼を申し上げます

² 紙幅の関係で校訂テキスト+校訂に関する註記(種村 2013)、和訳註(本論文)が別々に出版されるが、校訂テキストとそれに基づく訳註はその内容上分かちがたいものであるため、双方で註記が重複している場合がある。また、校訂テキストの出版から和訳註の出版まで少しばかり時間が経過した関係で、和訳註において種村 2013 の註記に対する情報の追加や訂正が施されている箇所がある。本論文においてはなるべく種村 2013 の参照箇所を明示しているが、それでも多少の分かりにくさがあるかも知れない。読者の皆様にはご不便をおかけするが、適宜双方の註記を参照して頂ければ幸甚である。

³ 種村 2013 において述べている通り、十分な critical apparatus を付した *Mṛtasugatiniyojana* のサンスクリット語校訂テキスト、2 種のチベット語訳の校合テキスト、Ācāryakriyāsamuccaya の最終章 *Nirvṛtavajācāryāntyeṣṭilakṣaṇavidhi* のサンスクリット語校訂テキスト、そのチベット語訳の校合テキスト、詳細な英訳註を含むモノグラフを近い将来に発表することを計画している。

くつかの事項をここで報告しておきたい。

Mṛtasugatiniyojana の著者はその儀軌が『秘密集会タントラ(*Guhyasamājatantra*)』の体系(nīti)に基づいており、さらに『悪趣清浄タントラ(*Sarvadurgatipariśodhanatantra*)』により補足されていることを述べている⁴。事実、*Mṛtasugatiniyojana* はその内容上、「死者蘇生のヨーガおよび意識の遷移」と「悪しき存在領域の除去」の2部に分けることができる。前者のうち「死者蘇生のヨーガ(mṛtasamjīvanayoga)」は『秘密集会タントラ』14.1 - 2 (特に 14.2c)にその典拠がある。そこではローチャナーのマントラ(=明呪 *vidyā*)が死者を蘇生させると説いている。「意識の遷移」は *utkrānti* と呼ばれる、ヨーガによる「意図的な死」の技法を死者に応用したものである。この *utkrānti* は *Guhyasamājatantra* には直接説かれていないが、*Guhyasamājatantra* の一流派であるジュニャーナパーダ流の開祖である *Buddhaśrījñāna* の『二次第による真実の修習という口伝(*Dvikramatattvabhāvanānāma Mukhāgama*)』(いわゆる、『大口伝書』)に文殊の啓示という形で説かれている。

桜井宗信氏が報告しているように、チベット大蔵経においてジュニャーナパーダ流に分類されている *Guhyasamājatantra* の註釈書が、*Guhyasamājatantra* 14.2 を註釈する形で「死者蘇生のヨーガ」を説いている⁵。それらの註釈書の説く「死者蘇生のヨーガ」は細部においては異なる点があるものの、そのアウトラインは概ね以下の通りである。

- (1) 司祭(*ācārya*)がローチャナーのヨーガを行う。すなわちローチャナーと一体になる。
- (2) 他世界にある死者の意識を引き寄せ、儀礼の対象となる死体に入れる。
- (3) ローチャナーの心真言(*hṛdaya*) "*moharati*"を唱え、そこから発する光明で死

⁴ 種村 2004: 347, 338 註(8)及び Tanemura 2007: 3 参照。

⁵ 桜井 2009: 198 参照。桜井氏が考察した註釈書は以下の通りである。(1) Thagana 著 *Guhyasamājatantravivaraṇa*. Ota. 2708, Toh. 1845. 以下, *Vivaraṇa*. (2) Cilupa (or Celuka) 著 **Ratnavṛkṣanāma Guhyasamājavṛtti*. Ota. 2709, Toh. 1846. 以下, *Ratnavṛkṣa*. (3) *Jinadatta 著 *Guhyasamājatantrapañjikā*. Ota. 2710, Toh. 1847. 以下, *Pañjikā*. (4) *Vimalagupta 著 *Guhyasamājālaṃkāra*. Ota. 2711, Toh. 1848. 以下, *Alaṃkāra*. (5) Ratnākaraśānti 著 **Guhyasamājānibandha Kusumāñjali*. Ota. 2714, Toh. 1851. 以下, *Kusumāñjali*. (6) *Pramuditākaravarman 著 *Guhyasamājatantraṭīkā Candraprabhā*. Ota. 1852, Toh. 1852. 以下, *Candraprabhā*. 本論文でも上記6註釈文献を比較考察の対象としている。また、桜井氏が当該論文において考察しているように、Vīṭapāda 著 *Guhyasamājasādhanaśiddhisambhavanidhi* (以下, *Siddhisambhavanidhi*)も同様の死者蘇生のヨーガを説いている。

者の身体を見えなくする。

(4) 死者がローチャナーの姿をとると観想する。このとき、死者の感覚器官の構成要素や身体・言語・心が加持される。すなわち、ローチャナーのそれと同等となる。

(5) ローチャナーの集団に死者に対する灌頂を行わせ、司祭自らも灌頂を行う。

Mṛtasugatiniyojana に説かれる「死者蘇生のヨーガ」も上述の内容とパラレルであり、*Mṛtasugatiniyojana* とジュニャーナパーダ流との近接性を示しており、また *Mṛtasugatiniyojana* の内容理解の助けとなる。読者の便を図るため、Appendix として、比較考察の対象とした *Guhyasamājatantra* 諸註釈の当該部分のテキストを掲載することとする。

試 訳

[1] 帰敬偈

1. 他者の利益を喜び (parārtharatām), 死者を蘇生させる (mṛtasamjīvanīm), ローチャナーという女神⁶に敬礼し、死者の蘇

⁶ 本論文の冒頭で述べたように、ローチャナーが死者を蘇生させることは、*Guhyasamājatantra* 14.1 - 2 に説かれている。当該部分のサンスクリット語テキストは Appendix を見よ。【和訳】「オーム。ルル、輝け、燃え上がれ、とどまれ、成就した女神ローチャナーよ。すべての目的を成就させる者よ。スヴァーハー」この["妻"が]唱えられるやいなや、すべての幸運を求める者は、金剛のごとき仏を想起しつつ、満足し、喜びを得た。[この"妻"(=上のヴィドゥヤー、つまり女性形で表現される「真言」)、すなわち女神ローチャナーは]諸仏にとっての災厄消除を生ぜしめ、すべての儀礼行為を成就するものであり、死者を蘇生させ、金剛の誓戒を発動させるものであると説かれている。「オーム。ルル(om ru ru)」で始まるヴィドゥヤー(マントラ)は「すべての仏の妻」であると、このヴィドゥヤーの前で説かれている。

このヴィドゥヤー自身は *Guhyasamājatantra* に先行する *Susiddhikaratantra* において説かれており、災厄消除 (śāntika) の儀礼に使用されると説かれている。*Susiddhikaratantra* (Chinese Translation): 佛部之中。用佛眼號爲佛母。用此真言爲扇底迦。佛母真言曰「曩謨婆(去)伽嚩姪瑟膩(二合)沙(去)也唵(一)嚕嚕娑普(二合)嚕(二)什嚩(二合)囉(三)底瑟吒(二合四)悉駄(去)路者寧(五)薩囉嚩(引二合)囉他(二合)娑(引)駄寧(六)娑嚩(二合)訶」(Taisho vol. 18, 603c13 - 19). Giebel's Translation: Within the Buddha Family use the Buddha-Mother, who is called Buddhacānā (Buddha-Eye): use her mantra for the śāntika [rite]. The mantra of the Buddha-Mother is: *Namo bhagavatoṣṇīṣāya, om ru ru sphuru jvala tiṣṭha siddhalocani sarvārthasādhani svāhā*. (Homage to the Blessed One, to the Protuberance [on the crown of the Buddha's head]! Om, roar! flash! blaze! abide! O you with perfected vision! you who accomplish all objectives! svāhā! (Giebel 2001: 130.23 - 30) チベット語訳における対応箇所ではマントラ自身は説かれておらず(Giebel 2001: 312, note 7), 異なる章で説かれている。*Susiddhikaratantra* (Tibetan Translation): gtsug tor padma'i rigs dag la || rig

生のヨーガに基づいた(mṛtasamjīvanayogāt)死者が良い存在領域
に赴くよう仕向ける手段(mṛtasugatiniyojanam)を説明しよう⁷.

[2] 死者蘇生のヨーガおよび意識の遷移

2 - 3. 死者の家が完全に人払いされたら(mṛtasadmani suvivikte)⁸,

ヨーガ行者 [= 葬儀の司祭者] は、あらゆる供養の品を備え

sngags chen mo can dang ni || gos dgar can ni gang yin pa || de yis *de (D; da P) yi mdun du bzlas || om
ru ru *sphu (D; sbu P) ru dzwa la ti ṣṭha si ddha lo tsa ni sa rba a rtha sā dha ni swā hā || (P f. 237v 1 - 2,
D f. 175r4 - 5).

Vāgīśvarakīrti の *Mṛtyuvañcanopadeśa* にもこのマントラが説かれている。当該箇所によれば、以前の業の力が起こってきてもこのマントラにより死を避けることができると説かれている。*Mṛtyuvañcanopadeśa* 3.44 - 45: pūrvottaraśikhādūrvāpravālāyutahomataḥ | pūrvakarmaprabhāvōttham api mṛtyuṃ nivārayet || om ādau ruru tato 'taḥ sphurupadam ataḥ param | jvala tiṣṭha tathā siddhalocaneti padatrayam || sarvārthasādhanaṇi svāhā mantra 'śokadale 'male | pradattadakṣiṇācāryair likhitaś candanadravaiḥ || (S_{ED} p. 104).

上述の *Guhyasamājantra* 14.1 - 2 を典拠とした「死者蘇生儀礼」が *Vitapāda* の著した *Siddhisamḥbavanidhi* に説かれていることが、桜井宗信氏により指摘されている(桜井 2009)。この死者蘇生儀礼は災厄消除の儀礼(zhi ba'i las, *śāntikarma)に含まれており、さらにローチャナーを主尊とする儀礼である。これは上述のマントラの機能と一致するものである。ただし、*Siddhisamḥbavanidhi* に説かれているローチャナーのマントラには以下に引用するように「死者が蘇生せんことを」という句が追加されている(桜井 2009: 199 - 200)。*Siddhisamḥbavanidhi*: om ru ru sphu ru dzwa la ti ṣṭha si ddha lo tsa ni sa rba a rtha sā dha ni shi ba sos par gyur cig swā hā (P f. 46b5, D f. 40r1)。これは、註 11 で述べるようにこの「死者蘇生の儀礼」が、災厄消除(śāntika)と延命という利益の増大(pauṣṭika)の二つの側面を備えているためであると考えてよいであろう。

⁷ この最初の帰敬偈は韻律上問題がある。前半部の韻律は āryagīti のものであるが、もしこの偈の韻律が āryagīti であるならば、前半と同じ 12+20 モーラのパターンが繰り返されるはずであるが、後半のそれは通常の āryā のもの(12+15 モーラ)となっている。もし第 2 pāda の mṛtasamjīvanīm が samjīvanīm という読みであるならば韻律上問題はなくなる。当該部分の読みがももとは samjīvanīm であり、意味を明確するために誤って後に mṛta が挿入された可能性は十分に考えられるであろう。註 6 で示されているように *Guhyasamājantra* 14.2 においてローチャナー(のマントラ)は mṛtasamjīvanī であると説かれている。

⁸ vivikta というのがどのような状態であるのか著者は詳しく語っていない。この後観想上で蘇生した死者に対して入門儀礼(灌頂)を授けるので、幕で仕切るなどをして、マンダラを作成し灌頂を授ける空間とその他の空間を仕切るなどのことが考えられる。*Śaivasiddhānta* の儀礼マニュアルである *Somaśambhupaddhati* では、死体が荼毘に付される場所が幕により覆われることが規定されている(*Antyeṣṭividhi*, B_{ED}, vv.20 - 21, vol. 3, pp. 593, 595; K_{ED} vv. 1156 - 1157)。ヴェーダ儀礼では、*Baudhāyanapitṛmedhasūtra* が火葬前の遺体の処置の段階で、遺体が他の眼に触れないような仕切られた空間に置かれることを規定している(辻 1977: 338)。ただし現時点で筆者は *Baudhāyanapitṛmedhasūtra* のサンスクリット語テキスト(W. Caland. ed. *The Pitṛmedhasūtras of Baudhāyana, Hiraṇyakeśin, Gautama / edited with critical notes and index of words*. Leipzig : FA. Brockhaus, 1896)にアクセスできていない。*Guhyāpannapañjikāpiṇḍārthapradīpa* は火葬を行う場所を shin tu dben pa'i gnas (*suviviktadeśa)と規定している(桜井 2007: 164)。shi ba *sta (D; lta P) gon la gnas pa'i ting nge 'dzin to zhes bya bas | ro sta gon la gnas pa bstan te | de yang de nas ro sta gon la gnas pa ni | shin tu dben pa'i gnas su | (P f. 36r1, D f. 30r2 - 3)。shin tu dben pa'i gnas とは、桜井氏が理解するような「人里を離れた場所」ではなく、「他人に見られないようにきちんと仕切られた場所」と理解するのがより適当であるかも知れない。

(sarovahārasaṃyuktaḥ), 白い花[環]と白い帯状の頭飾り(°uṣṇīṣaḥ)を身に付け⁹, 白檀の香(sitagandha)を[体に]塗り, 白い衣[を身に付け]白い装飾品で[身を飾り]¹⁰, 災厄を払った状態になり(śāntaḥ), 東を向き(prāgāśyaḥ)あるいは, それ[=東を向いていること]を強く確信し¹¹, [両手に]金剛杵と金剛鈴を持ち, やわらかく, 高い座に座すべきである(tiṣṭhet).

⁹ *Vīṇāśikhatantra* のパラレルな部分(註 15)を参照するのであれば, この複合語(dhṛtasitakusumoṣṇīṣaḥ)は, 「白い花環(= sragvī)と白いターバンを身に着ける」と解釈するのが良いであろう.

¹⁰ 先の *Guhyasamājatantra* 第 14 章の冒頭部分の引用からわかる通り, ローチャナーは災厄消除の儀礼と関係している. たとえば *Guhyasamājatantra* 13.39 を見よ. śāntike locanākāram (M_{ED} p. 48, l. 7). *Pradīpoddīyotana ad Guhyasamājatantra* 13.39a: śāntikeṣu jvarādyapaharaṇalakṣaṇe karmaṇi locanākāram śuklavarnam śuddhasvabhāvaṃ vāruṇamaṇḍalaṃ dhyāyāt (p. 129, ll. 10 - 12). この災厄消除の儀礼に使用される色は白である. 上の *Pradīpoddīyotana* の引用を見よ. また *Pradīpoddīyotana* は『釈タントラ(Vyākhyātantra)』からの引用として以下を説く. *Pradīpoddīyotana ad Guhyasamājatantra* ch. 14: śāntike śuklavarnam (M_{ED} p. 142, l. 10). 【和訳】「災厄消除[の儀礼]においては白[が用いられるべきである].」

川崎一洋氏の報告によると, Ānandagarbha 作 *Sarvadurgatipariśodhanapretahomavidhi* (Ota. 3459, Toh. 2632)及び *Sarvadurgatipariśodhanamarahomavidhikarmakrama* (Toh. 2633)では, 荼毘護摩に際しての火炉が円形で白色であることが説かれ, この儀礼が śāntika に即して行われることが示されている(川崎 2003: 7).

葬儀において「白い」物を使用することは, Pāsupata の葬儀文献(Gārgya 著 *Anteṣṭividhi*)でも規定されている. *Anteṣṭividhi* 16cd: śuklāny ādāya puṣpāni candanam sūtram eva ca | (Acharya 2010: 143). Diwakar Acharya 氏は, Pāsupatasūtra が Pāsupāta 派の者に裸であるか衣一枚のみ(そしてそれは白であると考えられる)の着用を義務づけていること, 同じオプションがジャイナ教徒によっても実践されていることから, この「白」を好む傾向が過去において多くの苦行者の集団により共有されていたのではないかと考えている(Acharya 2010: 144, note 10). 筆者のこの見解に異を唱えることはないが, Pāsupata の *Anteṣṭividhi* に見られる白を好む記述と, 後代のタントラ儀礼における儀礼の種類と色との対応の間に何らかの関連性のある可能性は考慮に入れておくべきであろうと考えている.

¹¹ 白が災厄消除(śāntika)の儀礼に使用されるのに対し, 通常東を向いて行う儀礼は寿命・富・美・幸運等の増大を目的としたもの(増益 pauṣṭika)である. このことは, 例えば, *Pradīpoddīyotana* が引用する『釈タントラ』で説かれている. *Pradīpoddīyotana ad Guhyasamājatantra* ch. 14: uttarābhimukhaḥ śāntim pauṣṭikam prāṇmukhas tathā | (C_{ED} p. 142, l. 5). 【和訳】「災厄消除[の儀礼]は北を向き, 寿命・富・美・幸運等の増大[を目的とした儀礼]は東を向き[行う]べきである.」これは, *Guhyasamājatantra* の当該詩節が本来「死者の蘇生」という「寿命の増大」を目的としたものであったものが, 葬儀という異なる目的に使用された結果であると考えられる. 川崎一洋氏の報告によると Ānandagarbha 作 *Sarvadurgatipariśodhanapretahomavidhi* (Ota. 3459, Toh. 2632)及び *Sarvadurgatipariśodhanamarahomavidhikarmakrama* (Toh. 2633)では, 司祭が東を向いて儀礼を行うことが説かれている(川崎 2003: 10). 両文献が説く火炉の色と形状を考慮するならば(註 10を参照), この両文献も葬送儀礼を śāntika と pauṣṭika の 2 つの性質を備えたものであると理解していると考えて良いであろう. それに対して, Āryadeva ('Phags pa lha)に帰されている *gSang ba 'dus pa'i ro bsreg gi cho ga* (Ota. 2663, Toh. 1807)は, v.13ab で司祭が北向きで儀礼を行うことを説いている. dbang bskur zin dang gnas su *gzhaḡ (D; bzhaḡ P) || bdaḡ gis byang du kha bltas te || (P f. 133v2, D f. 117v2). 桜井 2010: 69, 72 を参照.

4. 五甘露¹²[の混ざった]水とともに¹³、白檀などの香を前にある
マンダラ¹⁴に塗り、白い花で飾るべきである¹⁵。

5. 賓客用の水などに、svāhā で終わるそれらに固有のマントラを
(svamantraiḥ)¹⁶促す[言葉]とともに(sacodanakaiḥ)¹⁷唱えるべきで
ある。[自らの]心臓にある月輪にある自らの[尊格]の種字

¹² *Mṛtasugatiniyोजना* が *Guhyasamājantra* の体系に依拠していることから、ここでいう五甘露は「精液・血・人肉・小便・大便」の 5 種類の不浄物が想定されるかも知れない。しかし、葬儀が公共的な儀礼であることを考慮するならば、この場合の五甘露は、「乳酪・牛乳・凝乳・蜜・氷砂糖」であると考えの方が適切であるかも知れない。このような「一般的な」五甘露は、公共的な儀礼である *pratiṣṭhā* でも使用される。例えば、*Kriyāsamgrahaṇīkā (Pratiṣṭhā)*: *miśritadadhidugdhagṛtāmadhukhaṇḍarūpaiḥ pañcāmṛtair ...* (Tanemura 2004: 169.7 - 8). 【和訳】「乳酪・牛乳・凝乳・蜜・氷砂糖の混合物の形をとった五甘露で...」また乳製品等の色が白であることから、災厄消除(*śāntika*)の儀礼に適すると考えることもできるであろう。種村 2004: 334, 註 16 も参照のこと。

¹³ この部分は Tib.1 は *°ādigandaiḥ* に相当する部分が訳されていない。 *rtsa nda na dkar po dang ni bdud rtsi lnga || yang dag sbyar ba'i chu yis ...* (P f. 25v6 - 7, D f. 35r4) 【和訳】「白檀と五甘露の混ざった水で...」

¹⁴ このマンダラは *maṇḍalaka* とも言われるもので、通常土と牛糞で作られ、師や尊格などを表し、その供養・礼拝のために使用される。Tanemura 2004: 220 - 221, note 19 を参照のこと。

¹⁵ 第 2 - 4 偈に平行な表現がシヴァ教の *vāmasrotas* の聖典 *Vīnāśikhatanra* に見られる。*Vīnāśikhatanra* v. 51: *sragvī sitoṣṇīśi caiva sarvālaṃkārabhūṣitaḥ | uccāsanasthaḥ prāgvaktraḥ kalpayet koṣamaṇḍale ||* (G_{ED} p. 67). *Vīnāśikhatanra* の当該詩節は葬儀と直接関係していない。*Vīnāśikhatanra* vv. 51 - 58 は *prastāra* という *mantroddāra* のためのダイアグラムの作成法を規定しているが、興味深い事実としては、当該部分のパラレルが *Sarvabuddhasamāyogaḍākinijāla-saṃvaratantra* の *uttarottaratantra* である *Sarvakalpasamuccaya* に見いだされることが苦米地等流氏により指摘されている(Tomabeche 2007)。

¹⁶ すなわち、*argha*, *pādyā*, *ācamana* に対して唱えるマントラをさすと考えられる。複数形なのは、唱える対象が *argha*, *pādyā*, *ācamana* と複数であるからである。これらが具体的にどのようなマントラであるかは示されておらず、*Guhyasamājantra* にも説かれていない。いくつかの文献を参照するのであれば、これらのマントラは *arghaṃ praticcha svāhā*, *pādyam praticcha svāhā*, *ācamanaṃ praticcha svāhā* で終わるマントラであると考えられる。例えば、*Saptākṣarasādhana of Advayaavajra (Sādhana-mālā No.251)*: *ṣoḍaśapūjādevīḥ saṃsphārya romaḥkūpāgrasandhiṣu vidhivad arghyapādyādikaṃ dadyāt. oṃ heruka arghaṃ praticcha svāhā. oṃ heruka pādyam praticcha svāhā. oṃ heruka ācamanaṃ praticcha svāhā* (vol. 2, p. 493, ll. 20 - 23). 【和訳】「16 の供養の女神たちを拡散させ、毛穴の上の[毛との]接合点において規定通りに閼伽水や洗足水などを与えるべきである。「オーン。ヘールカよ。閼伽水を受け取れ。スヴァーハー」「オーン。ヘールカよ。洗足水を受け取れ。スヴァーハー」「オーン。ヘールカよ。漱口水を受け取れ。スヴァーハー」」；*Vajrāvalī (arghādīdānalakṣaṇavidhi)*: *tṛtīyasyārghabhājanasya jalādikam añjalinaḥ gṛhītvā oṃ āḥ hrīḥ pravaraśatkāraṃ arghaṃ praticcha hūṃ svāhā iti paṭhan *vajrāñjalivikāśena* (em.; *vajrāñjalivikāśena* M_{ED}) *dadyāt trīṇ *vārāṃs* (corr.; *vārāṇ* M_{ED}) *tṛtīye praticchake. pūrvakarmatraye tv arghaṃ hitvā pādyam prokṣaṇam ācamanaṃ iti paṭhet* (M_{ED} §.2.2, vol. 1, p. 66, ll. 13 - 16). 【和訳】「第 3 の閼伽水器の水などを両手で掬い取り、「オーン。アーッハ。フリーッヒ。最上のもてなしである閼伽水を受け取れ。フーン。スヴァーハー」と唱えながら金剛合掌を解いて、3 回 3 番目の[水を]受け取るための器に与えるべきである。先の 3 つの行為においては、[マントラ中の]「閼伽水を」の代わりに、[それぞれ]「洗足水を」「洗浄水を」「漱口水を」と唱えるべきである。」

¹⁷ この「促す言葉(codanaka)」とは註 16 にあるマントラ中の *praticcha* (動詞の命令形)であると考えられる。註 66 も参照のこと。

(nijabījam)を觀想し、[儀礼を行う]場所、その他[＝司祭自身と死者蘇生のヨーガ]の守護を行うべきである。

その場合の、[儀礼を行う]場所と[司祭者]自身と[死者蘇生の]ヨーガの守護[に用いる]マントラは、「オーム．アーッハ．障害となる者を殺す者よ．フーム」である。あるいは、「*namaḥ samanta...*」で始まるマントラ¹⁸を[用いても良い]。

6.¹⁹ 規定を知るヨーガ行者は(*vidhānavid yogī*)は、規定どおりにローチャナーのヨーガを行い(*pravidhāya locanāyā yogam*)[＝ローチャナーを觀想し]、よく完成した輪の形をした光線を(*susiddham cakraghṛṇim*)²⁰[自らの]心臓にある種字の先から放出するべきである²¹。

7. その[光線]により、他世界にある²²真赤で明瞭な、法門の形を

¹⁸ *om āh vighnāntakṛt hūm* (オーム．アーッハ．障害となる者を殺す者よ．フーム) は *Amṛtakuṇḍalin* のマントラと呼ばれるものである。オプションとして挙げられている「オーム．遍く何某に敬礼して...(*om namaḥ samanta...*)」で始まるマントラは、*Guhyasamājantra* 14.11+にある *Amṛtakuṇḍalin* のマントラと考えてよい。種村 2013: 116 - 115, 註 7 を参照。

¹⁹ この第 6 偈から第 13 偈までが *Guhyasamājantra* の諸註釈書が説く死者蘇生のヨーガに対応する。

²⁰ 尊格を招き下ろす光線の形状は、Appendix に引用した *Guhyasamājantra* の註釈文献と *Mṛtasugatiniyोजना* とで異なる点がある。*Guhyasamājantra* の註釈文献は金剛鉤を放出すると規定している。鉤型の光線は尊格等を引き下ろす時に用いる標準的な觀想法である。*Mṛtasugatiniyोजना* の当該箇所は光線の形状が *cakra* となっているのは、これがローチャナーのシンボル(*cihna*)であることと関係していると考えられる。例えば以下を参照。*Pañcākāra of Advaya-vajra: āgneyakoṇadale candramaṇḍalopari *śuklalomkārajā* (S_{ED}: *śuklalāṃkārajā* T_{ED}) *śuklavārṇā locanā cakra-ciḥnā prthivīdhātusvarūpā tathāgatakulodbhāvā moharaktā* (S_{ED} p. 42, ll. 23 - 25; T_{ED} p. 213, ll. 8 - 10)。また Bhattacharya 1958: 54 - 55 を参照。

²¹ おそらくここは *hṛdayabījāgrāt* の corruption であると考えられる。ここでいう種字は、*Ratnavṛkṣa* と *Alaṃkāra* の対応箇所を参照するならば、*laṃ* である。また先の註 20 に挙げた *Pañcākāra* からの引用や、以下の *Niṣpannayogāvalī* や *Asaṅga* に帰された *Prajñāpāramitāsādhana* (*Sādhana-mālā* No. 159)からの引用を参照するならば、*laṃ* の他に *loṃ*, *lām* という種字である可能性もある。*Niṣpannayogāvalī* (*Mañjuvajra-maṇḍala*): *locanādevīnām *laṃ* (L_{ED}; *loṃ* B_{ED}) *maṃ paṃ taṃ jaḥ hūṃ vaṃ hoḥ khaṃ raṃ* (L_{ED} p. 6, ll. 4 - 5; B_{ED} p. 4, l. 5)。(L_{ED} の critical apparatus では *lām* という異読も報告されている。); *Prajñāpāramitāsādhana*: *vairocana-ratnasambhavamadhye *locanādevīm* (em.; *locanādevīḥ* ed.) *pūjayet. om locanāyai loṃ svāhā. om vajrapuṣpe *hūṃ* (em.; *huṃ* ed.) *svāhā* (vol. 1, p. 322, ll. 8 - 10)。

Tib.2 はこの詩節の後半を以下の様に訳している。snying ga'i sa bon gnyug ma de las ni || grub pa yang ni yang dag spros bar bya || (P f. 30r1 - 2, D f. 32r2)。gnyug ma は TSD において nityam, ādyam の訳語として挙げられている。*cakraghṛṇim* は訳されていない。

当該箇所は種村 2013 で註記されているが(115, 註 8)、新たに情報を追加する次第である。

²² *Mṛtasugatiniyोजना* は、この時点で死者の意識は単に *paraloka* にあると記述しているだけである。Appendix に引用している *Guhyasamājantra* 註釈文献中、*Pañjikā* と *Kusumāñjali* は、*Mṛtasugatiniyोजना* 同様、単に他世界としている。その他の、*Vivaraṇa*, *Ratnavṛkṣa*, *Alaṃkāra*, *Candraprabhā* は中有(あるいは *gandharvasattva*)か子宮であるとしている(桜井 2009: 208, 註(10))

しているか(dharmamukhākṛti),あるいは風によっても揺らぐこと
のない灯明にも似ている²³意識(jñānam)²⁴を導いてくるべきであ

も参照)。Siddhisambhavanidhi も、中有もしくは[六趣の]胎内としている(桜井 2009: 200 - 201)。
Siddhisambhavanidhi: de yis de nas *lam (D; lam P) 'phros pa'i || lcags kyu'i gzugs su phyung byas te ||
de yis shi ba'i rnam par shes || bar ma do na gnas pa'am || yang na skyes gnas chud kyang rung || dri
med mar ma'i tshul gnas pa'i || bkug ste ro yi snying ga ru || bcug nas dbyung sngags de la dgod || (P f.
46v5 - 7, D f. 40r1 - 2)。

²³ 他世界にある意識の形状に関して、Appendix に引用している Guhyasamājatantra の諸註釈書は
以下の様に規定している。Vivaraṇa: 「汚れなく動揺のない灯明に似ている」、Ratnavṛkṣa: 「汚れ
なく動揺のない灯明のよう」、Pañjikā: 「明瞭な赤い宝珠の光を有する死者の姿に似ているか、あ
るいは a 字の形をした」、Alaṃkāra: 「汚れなく、揺れることなく、動揺することのない、本初か
ら継続して[ととも]灯明の炎に似た形をしている」、Kusumāñjali: 「明瞭で赤い a 字の形か、風によ
って動揺しない不動の灯明のような」、Candraprabhā: 「明瞭で、風によって動かない灯明の炎
の形」としている。また Siddhisambhavanidhi は身体に入れる意識の形を「無垢なる灯明に似た
形(dri med mar me'i tshul gnas pa) (Cf. 桜井 2009: 208-209, 註 11)としている。このように「動
揺することのない灯明の形」は各文献に共通している。また「汚れない」あるいは「明瞭な」と
いう形容も各文献に共通している。また a 字あるいは死者の姿という規定も見られる(この場合
には「赤い」という形容詞が付く)。それでは、Mṛtasugatiniyojana 「法門のような」という表現は
どのように解釈するべきであろうか? 上述の「意識が a 字の形をしている」という規定と、さら
に om akāro mukhaṃ sarvadharmāṇām ādyanutpannatvāt (オーン。a 字はすべての法の門である。
本不生の故に。)という、密教における重要なマントラの 1 つを参照するならば、Mṛtasugatiniyojana
の述べる法門の形とは a 字であると考えることができる。

それでは「赤い」という形容詞はどのように解釈するべきであろうか? いくつかの Yoginītantra
の sādhana で見られる観想法において、行者は自らを二つの hoḥ の字で挟まれた tryakṣa (om āḥ
hūm)であると観想し、観想された尊格の口から中央の脈管を通して下降し、その男根から女尊の
女陰に入ると観想する。この観想法の背景にあるのは受精であり、その類似から Kriyā-
samgrahapañjikā の pratiṣṭhā の pūṃsavana における観想法にも適用されている(Tanemura 2004:
265 - 267, 特に註 129)。一般的に二つの hoḥ に挟まれた tryakṣa は gandharvasattva であると見
なされており、いくつかの文献にはこの tryakṣa を挟む二つの hoḥ が赤色であると説かれてい
る。Ḍākinīvajrapañjaratantra: gandharve tu samāviṣṭe drutāpattim anusmaret. Ḍākinīvajra-
pañjaratippatiḥ ad loc. (glossing gandharve) raktahoḥkāradvayamadyikṛtākṣaratraye (f. 3v6).
Advayavajra's Hevajrasādhana: de nas om āḥ hūm gi yi ge gsum gyi rang bzhin hoḥ dmar po gnyis
kyis mtshan pa mtha' ma brten pa ... (P f. 194v3, D f. 166v5 - 6)。Yoginītantra における以上の観想法
に関しては Isaacson 2007: 298 - 299 を参照。Vivaraṇa および Ratnavṛkṣa ではローチャナーのヨー
ガを行った司祭が、ローチャナーのマントラ(おそらくは種子)と儀礼の対象となる死者の名前に
挟まれた三字マントラ(=三真実 tritattva)を唱えることが説かれている。Vivaraṇa: rang gi sngags
dang bsgrub par bya ba'i ming dang spel zhing yi ge gsum gyi nang du chud par bzlas la
(*svamantrasādhyanāma-vidarbhita-tryakṣasaramadhyagataṃ japtvā) 「[ローチャナー]自らのマントラと
儀礼対象者[=死者]の名前に挟まれ、三文字が中央にあるものを唱え」; Ratnavṛkṣa: de'i snags
dang bsgrub bya'i ming spel ba de nyid gsum gyi bar du chud pa bzlas pas (*tadmantrasādhyanāma-
vidarbhita-tryakṣasaramadhyagataṃ japtvā) 「その[=ローチャナーの]マントラと儀礼対象者[=死者]の
名前に挟まれ、三真実が中央にあるものを唱え」。

上で見た Yoginītantra における観想法と Appendix に引用した Vivaraṇa と Ratnavṛkṣa に見られ
る観想法との類似から、Mṛtasugatiniyojana の当該部分の観想法の背景には、受精あるいは受胎が
あると考えることができる。したがって識が赤色である理由の 1 つとして、それが母体の経血か
らの連想が考えられる。それとともに、以下のことも想定が可能である。Appendix に引用した
Guhyasamājatantra の諸註釈では、蘇生前の死者の意識は中有もしくは六趣の胎内にあると説か
れている。周知のごとく、アビダルマにおいて中有は gandharva と同一視されている。
Abhidharmakośabhāṣya では妊娠の条件として(1)母親が月経中であること、(2)父母の性交がある

る²⁵.

8. 導き寄せられたその意識を頭から死者の心臓²⁶へと入れるべきである. その次に[司祭はローチャナーのヨーガより]立ち上がり[=ローチャナーのヨーガを終え], [死者が]意識を備えて座っていると観想すべきである.

9. その[死者の]心臓に「モーハラティ(moharati)」²⁷[というマン

こと, (3) *gandharva* がその場にいること, の 3 つを挙げている. *Abhidharmakośabhāṣya* ad *Abhidharmakośa* 3.12c: *trayānām sthānānām saṃmukhībhāvāt mātuḥ kuṣau garbhasyāvakrāntir bhavati: mātā kalyāpi bhavati ṛtumatī ca, mātāpitarau raktau bhavataḥ sanipatitau ca, gandharvaś ca pratyupasthito bhātīti* (p. 121, ll. 22 - 25); *Sphuṭārthā* ad loc.: *trayānām sthānānām iti trāyānām hetūnām. mātā kalyā mātā nīrogā. ṛtumatī rajasvalā. tad etad ubhayaṃ prathamam sthānam bhavati. raktau saṃnipatitāv iti maithunadharmam kurvantau. idaṃ dvitīyaṃ sthānam. gandharvaś ca pratyupasthita iti tṛtīyam* (p. 270, ll. 13 - 16). 死者の意識の引き寄せと死体への挿入に受精との類比があるならば, 意識の形容詞としての *rakta* には「赤い」の他にも「性的に興奮した」という意味合いも含んでいる可能性がある. もしこのことが想定可能であるならば, Tib.2 の *chags* という訳もあり得ることになる.

²⁴ 通常仏教において死に際して身体から離れていくものは, 意識(*viññāna*)であると考えられている. 例えば, *Yogācārabhūmi (Manobhūmi)*: *tataś cyutikāle 'kuśalakarmakāriṇām tāvad ūrdhvaḥ bhāgād vijñānam āśrayaṃ muñcati. ūrdhvaḥ bhāgo vāsyā śtībhavati. sa punas tāvaṃ muñcati yāvad dhṛdayapradeśam. sukrītakāriṇām punar adhobhāgād vijñānam āśrayaṃ muñcati. adhobhāgaś cāsya śtībhavati tāvad yāvad dhṛdayapradeśam. hṛdayadeśaś ca vijñānasya cyutir veditavyā. tataḥ kṛtsna evāśrayaḥ śtībhavati* (p. 18, ll. 16 - 20). *Mṛtasugatiniyोजना* においては *jñāna* が *viññāna* と同義語で使用されている. また後に第 9 偈で出てくる *vijñapti* もここでは *jñāna* と同義語で使用されている.

²⁵ この死者の意識を引き寄せ, 死者を蘇生させる観想法は, *Guhyasamāja* 系以外の文献でも説かれている. 例えば *Agrabodhi* 著 *Mañjuśrīnāmasaṃgītisādhanaopāyikā* に対する *Smṛtijñānakīrti* の註釈 *Mañjuśrīnāmasaṃgīti guhyāpannopāyikāvṛtījñānādīpa* では, *mūla* の *de nas a yi 'phros 'du bya* (P f. 82r6, D f. 68r3) を以下の様に註釈し, 死者の意識の引き寄せと死体への挿入を述べている. *de nas a yi 'phro 'du las || zhes pa ni bdag gi thugs kar a dkar po bsam | de las 'od zer 'phros pas 'gro drug gi bag chags sbyangs | *tshes 'das pa'i (P; che las 'das pa'i D) shes pa bkug *la (D; nas P) | ro la bcug la | de bzhin gshegs pa 'khor dang bcas pa la thim par bsam mo ||* (P f. 263v4 - 5, D f. 138v4 - 5). 【和訳】「次に a 字の拡散と収斂により」とは, [阿闍梨]自らの心臓に白い a 字を観想し, そこから光線を放出し, 六趣の潜在印象を取り払い, 死者の意識を引き寄せ, 死体に入れ, [死者が]眷属を伴った如来に融解すると観想する, ということである.」桜井 2007: 162 を参照のこと. また桜井氏は *Mañjuśrīmitra* の著作の死者儀礼に関する論文の中で, 死者の蘇生に関しても簡単に言及している(桜井 2006: 4).

密教文献の説く死者蘇生のヨーガは, シヴァ教文献の規定する葬送儀礼における「大網のヨーガ(*mahājālayoga*)」に相当する. シヴァ教の大網のヨーガの方法は, 例えば, *Tantrāloka* 21.25b - d において規定されている. *Jayaratha* の註釈を参照するならば, このヨーガを修する阿闍梨は, 鼻孔から *prāṇa* を体外のあらゆる方向に放出し, 光の束であらゆる *adhvan* を包み込み, 対象となる個我を引き寄せることが説かれている.

²⁶ Tib.1 は *ro yi spyi bo nas ni* (P f. 26r3, D f. 35r7) として, *mṛtasya* を *śīrasā* にかけて訳し方をしている.

²⁷ モーハラティ(*Moharati*)とはローチャナーの別名である. 例えば *Guhyasamājatantra* ch.1 (M_{ED} p. 8, ll. 1 - 4) and *Pradīpoddhotana* ad loc. を見よ. *Guhyasamājatantra* ch.1: *atha bhagavān sarvatathāgatānūrāgaṇavajraṃ nāma samādhim samāpadyemām sarvatathāgatāgramahiṣm*

トラを]投げつけ(kṣiptvā), その[マントラから出る]輝く光線の環により (tadraśmimālayojjvalayā), 彼の身体を「空」にして (śūnyīkṛtya taddeham)²⁸, 意識が残っている (vijñaptipariśeṣam) と観想すべきである [=司祭が認識する死者の身体には固定的実体がないと観想するべきである].

10. 次に、「モーハラティ」と唱えながら, その[死者が]ローチャナーの姿²⁹を取ると観想し, その[死者の]眼をはじめとする[感覚器官など]と身体など [=身・語・心] をすべて加持するべきである.

11. 彼 [=司祭] は, 心臓にある智の尊格 (jñānadevatā) の心臓にある月輪にある根本のマントラから生じた雲なす女神たちに (devīmeghaiḥ)³⁰, 水晶 [でできた] 瓶の (jyotīrasakalaśagataiḥ)³¹ 甘露

svakāyavākcittavajrebhyo niścārayām āsa. moharati. 【和訳】「次に世尊は「一切如来の金剛の如き執着」という精神集中に入り, 一切如来の最上の女王を自らの金剛の如き身体・言語・心より放出した. 「モーハラティ」 *Pradīpodyotana*: sarvatathā[ga]to vairocanaḥ tadanurāgaṇavajrā locanā. yathārutam. moharatīti moho vairocanaḥ tasmin ratiḥ. neyārthaḥ. mohaviśuddhe ratir moharatiḥ. nītārthaḥ (C_{ED} p. 25, ll. 12 - 14). 【和訳】「一切如来」とはヴァイローチャナである. その[ヴァイローチャナに対する]金剛の如き執着を有するのがローチャナーである. [これは]字義通りの解釈である. 「モーハラティ」とはモーハ(迷妄)はヴァイローチャナであり, その[ヴァイローチャナ]への性的快感(ratiḥ)である. [これは]その意味が解明されていない解釈である. 迷妄が浄化された時の性的快感が「モーハラティ」である. [これは]その意味が完全に解明された解釈である. 」

²⁸ Appendix に引用した *Guhyasamājatantra* 注釈文献において「身体を空にする」という部分に対応する部分は, *Vivaraṇa*, *Ratnavr̥kṣa*, *Pañjikā*, *Kusumāñjali* が「光明で死体を見えなくする」, *Alaṃkāra* が「死体を光明にする」と規定している(これは上述 4 文献と表現が異なるだけで, 類似の観想法であろう). (*Candraprabhā* の説く「恐怖を見えなくする」がどのようなことを意味するのか不明である. この部分に corruption のある可能性は否定できない.) この対応箇所を参照すれば, 「身体を空にする」とは「身体を光明で不可視にする, あるいは焼き払う」ということになる. したがって, ここでの観想法は, 死者の心臓に moharati というマントラを, あたかもミサイルのように打ち込み, そこから発する光により死体を不可視にする, あるいは焼き払う, というものであると考えられる.

²⁹ ローチャナーの容貌に関しては, 例えば, 以下の引用を見よ. *Niṣpannayogāvalī* (*Mañjuvajramāṇḍala*): tasya pūrvasyām diśi vairocanaḥ sitaḥ kṛṣṇaraktasavyetaramukhaḥ sitāṣṭāracaḥkrāśimāṇikamaladharaḥ. ... āgneyyām locanā vairocanaśamā (B_{ED} p. 2, l. 24 - p. 3, l. 5; L_{ED} p. 4, ll. 7 - 17). 種村 2004: 333: 註 20 も参照のこと.

³⁰ *Alaṃkāra*, *Kusumāñjali*, *Candraprabhā* の対応箇所を参照するならば, この女神はローチャナーのことである. 引き続き第 12 偈でもローチャナーの集団(locanāmeghaiḥ)と述べられている. また, 根本マントラとは文脈上「モーハラティ」のことであると考えられる.

³¹ jyotīrasakalaśagataiḥ という読みは意味と metre からの conjecture である. Tib.1 は shel gyi bum pa'i tshogs kyis (P f. 26r6, D f. 35v2)とあり, jyotīrasakalaśa-を支持している. また *Kusumāñjali* の対応箇所もこの灌頂のための瓶が水晶の瓶であるとしている. *Vimalaprabhā* は水晶の瓶は災厄消除 (śāntika) の儀礼に使用されると規定している. *Vimalaprabhā ad Kālacakratānta* 3.12: idānīm kalaśā ucyate. śāntike sphāṭikakalaśāḥ, puṣṭau raupyaḥ, māraṇe mānuṣakapālāḥ, uccāṭaṇe vidveṣa āyaśāḥ, vaśye sauvarṇāḥ, ākr̥ṣṭau tāmraḥ, stambhane mṛṇmayāḥ, mohane dārujā daśa kalaśā iti (S_{ED}, vol. 2, p.

をその[死者]に灌がせるべきである。

12. [以上のように]自らの身体から出て、拡散[のヨーガ]により虚空全体を遍満し(vyāptākḥilagaganamaṇḍalaiḥ), [収斂のヨーガにより]光の塊になる(rāsmipīṇḍāyamāṇaiḥ)³²ローチャナーの集団に(locanāmeghaiḥ)[死者に]灌水させるべきである³³。

13. その[=ローチャナーの]マントラが唱えられた水が満たされた[瓶の水を], 自らも(nijena)同様に[死者に]灌ぐべきである。そして頭に冠を, [右・左の]両手に, 金剛杵と[金剛]鈴を[それぞれ]与えるべきである³⁴。

14. 次にマントラ行者はクシャ草の先端を鋭い独鈷杵として観

13, ll. 3 - 5). 種村 2013: 115 - 114, 註 14 も参照のこと。

³² 筆者は rāsmipīṇḍāyamāṇa-を rāsmipīṇḍa から作られた名詞起源動詞 rāsmipīṇḍāyate の現在分詞として解釈している。

³³ 第 11 偈, 第 12 偈において異なる 2 種類の灌頂が説かれている。まず第 11 偈では、拡散のヨーガ(spharaṇayoga)により、司祭が自らの心臓にいる智の尊格の心臓にある種字から放出されたローチャナーの集団に瓶で灌頂させる。引き続き、第 12 偈では今度は収斂のヨーガ(saṃharaṇayoga)により、虚空に遍満したローチャナーの集団を光の塊にし、その光の塊となったローチャナーに再び死者に灌頂させる。Kusumañjali も同様に拡散したローチャナーの集団による灌頂と光の塊となったローチャナーの集団による灌頂を説いている。このような観想法は Guhyasamājatantra 13.80 - 83 とパラレルなものであろう。Guhyasamājatantra 13.80 - 83: khadhātumadhyagataṃ cintec chāntimaṇḍalam uttamam | bimbaṃ vairocanaṃ dhyātvā hrdaye 'tha pravinyaset || 80 || khadhātum locanāgraiḥ ca paripūrṇaṃ vibhāvayet || 81 || saṃhṛtya rāsmipīṇḍena ārambhasya nipātayet | romakūpāgravivare buddhameghān sphared vratī || 82 || abhiṣekaṃ tadā tasya buddhameghā dadanti hi | anena vajrasamayāḥ śrīmān bhavati tatkaṣaṇāt || 83 || (M_{ED} p. 52, ll. 2 - 8)。【和訳】「空中にある最上の寂静マンダラを観想せよ。ヴァイローチャナーの影像を観想し、[行者の]心臓に入れよ。ローチャナーを筆頭とする[ヴァイローチャナーの集団(=眷属)]に空中が満たされていると観想せよ。[それらを]光の塊に収斂し、病人の[頭に]下ろし[すべての病気を打ち砕く]べきである。誓戒を保持する者は、[順に]毛孔および頭頂の孔より雲なす仏を放出すべし。そのとき雲なす仏たちは彼[=病人]に灌頂を与える。これにより、その瞬間、彼は金剛の誓戒を保つ、吉祥なる者になる。」Guhyasamājatantra 13.82b の ārambhasya nipātayet の意味が今ひとつ不明である。上記の訳文は Pradīpoddhotana を参照している。Pradīpoddhotana ad loc: āturasya śīrasi pātayitvā sarvakiḷbiṣāṇi ghātayet (p. 135, ll. 25 - 26)。

第 12 偈にある anu は「第 1 の灌頂に続いて」といった意味であろう。この用法が極めて特殊であるため、Ācāryakriyāsamuccaya では tad anu という読みで「改訂」されたと推測できる。但し、tad anu では韻律に乱れが生じる。第 12 偈に関しては、種村 2013: 114 - 113, 註 16 で異なる解釈を提示したが、本論文で以上のような新しい解釈を提示している。当該偈の解釈に関しては、今後とも検討の必要がある。

³⁴ この観想した女神による灌水から金剛杵から金剛鈴の授与までの所作は、弟子の灌頂(入門儀礼)に対応する。まず女神たちが灌水すると観想しつつ司祭自身が死者に灌水する行為が「水灌頂(udakābhiṣeka)」、頭に冠をかぶせる行為が「宝冠灌頂(mukutābhiṣeka)」、金剛杵と金剛鈴を与える行為がそれぞれ「金剛杵灌頂(vajrābhiṣeka)」「金剛鈴灌頂(ghaṇṭābhiṣeka)」に相当する。

想し、金剛の穴に(vajrarandhre)³⁵投げ、それ[= 独鈷杵]が炎に似ていると観想すべきである。

15. 次に心を集中し、その[死者の]心臓に置かれ、輝いている(°visphurat°)意識を風にあおられて燃え上がる金剛の先端で(jvaladbhir vajrāgrair mārutoddhūtaiḥ)[遷移するように]促すべきである(saṃcodayet)。

16. 炎(dahanārciḥ)に触れている水銀のように³⁶、[意識が]上昇して上方の道を通り³⁷、解脱するかあるいは清浄な仏国土に赴くと観想すべきである。

17. もし他[の道]を通して[身体を離れるのであれば]、意識は輪廻の大海に落ちる。したがって、その[死者の意識が]上方の道を通して遷移するようにしなければならない。

18. 頭を通ると無色界に赴く。白毫[の部分]を通ると色界と呼ばれる場所に赴く。両目を通ると人間という存在領域に赴く。両耳を通るとシッダデーヴァという存在領域[に赴く]。

19. 両方の鼻の穴を通るとヤクシャという[存在領域に]赴く。口を通るとガンダルヴァという[存在領域に]赴く。臍を通ると欲界の神(kāmāmara)[という存在領域に赴く]。精液の出る道を通ると(retomārgeṇa)餓鬼(pretā)の存在領域に[赴く]。

20. 尿道を通ると動物の母胎(tiraścīm yonim)に[赴く]。肛門を通

³⁵ 「金剛の穴(vajrarandhra)」とはおそらく尿道のことであろう。Catuṣpīṭhanibandha ad Catuṣpīṭhatantra, Guhyapīṭha 3: pāṇeti vajrarandhram. 註 38 を参照。

³⁶ 第 14 偈から第 16 偈に死者の意識の遷移の観想法が説かれている。「炎に触れている水銀のように」という比喩の背景には錬金術があるように推測される。Alaṃkāra において、死者がローチャナーの姿に変化すると観想する際に、「成就した水銀により銅を金に変えるように」という比喩が見られる。Mṛtasuśrutiniyogajana の当該部分の背景には、あたかも錬金術のように、死者の意識に質的な変化が起こり、解脱するかあるいは清浄な仏国土に赴くという考えがあるのであろうか？

³⁷ 14 - 16ab は、Tib.2 では以下の様に散文で訳されている。de'i rje la sems mnyam par bzhag pas de'i snying gar bkod pa'i shes pa rnam par gsal ba yang dag par bskul zhing rdo rje'i 'od zer rlung gis phyung ba 'bar ba | 'od zer snying ga nas phyug bas reg pas dngul chu lta bur gyur bar bsam mo || (P f. 30r7 - 8, D f. 32r6 - 7)。【和訳】「その後、心を集中して、彼の心臓に置かれた明瞭な意識を覚醒させ、風により上昇し燃え上がる金剛の光と(?), 心臓から上昇した光と触れている(? あるいは、触れて?)水銀のごとくになると観想する。」

ると地獄(niraya)の存在領域に必ず意識は赴く³⁸。したがって、これらの道は避けなければならない。

[3] ホーマ

次に、その[死者を]解脱域に安住させるために目前で、罪障を取り除くためのホーマ(śāntikahoma)[の規定として]説明された、完全な儀礼手順により、あるいは「[献供する]供物は一つとする立場」にたって説明された(ekadravyahomapakṣoktena)規定により、祭式主催者(yājaka³⁹)により、司祭が使用する道具すべてを渡された金剛阿闍梨[=司祭]は、「智の火」に罪障を取り除くための献供を行うべきである。そのときに一方で、[儀礼補助者たちに]『般若経』などの大乘経典を読誦させるべき

³⁸ これらの体孔は navadvāra として説かれることが多い。navadvāra 自体は upaniṣad までさかのぼれる(Śvetāśvatara-upaniṣad III.18)。Mṛtasugatiniyojana の当該部分に見られる技法は、ヨーガの力においてアートマン(あるいは仏教の場合は「意識」)を上方の体腔より出す utkrānti の技法の応用である。仏教において utkrānti の権威となっている経典の一つに Catuspīṭhatantra がある。Catuspīṭhatantra が説く navadvāra は以下の通りである。Catuspīṭhatantra, Guhyapīṭha 3: bindunābhasya *ūrdhvānām (em. ūrdhānām MS) cakṣunāsādi karṇayoḥ | *pānāpānasya (em.; āpānāpānasya MS) dvārasya *bhavadvāraṃ (em.; navadvāra MS) tu lakṣaṇam || nābhe kāmikasvargasya bindūnām rūpadehinām | mūrdhni *ūrdhva(em.; ūrdha⁴⁰ MS)sthānasya gatyā tasyā paritavataḥ || yakṣabhavanasya nāsāyām karṇābhyām siddhadevatā | cakṣur yadi gate jñānām narānām nṛpavartinam || bhavadvārasya pretānām mūtre tiryakamṣ tatathā | aṣṭau narakagati jñānām apāna vijñāna śighrataḥ || (f. 68v(?)2 - 5); Catuspīṭhanibandha ad loc.: idānim utkrāntim āha. binduśabdena bhrūmadhyam. pāneti vajrarandhram. apānasyeti gudamārgaḥ. nābhe kāmikasvargasyeti nābhīmārgaṇa yadi vijñānām yāti tadā kāmadvātau devo bhavati. bhūmadhyarandrena yadā gacchati tadā rūpadhātau *jāyate (em.; jāmāte MS). *ūrdhveti (em.; ūrdhveti MS) kanakadvāreṇa yadā gacchati tadā maraṇād ūrdhvaṃ śīghram eva gater gatyntaram viśiṣṭam gacchati. bhavadvāraṃ mukham. apānamārgaṇa yadā yāti tadā śīghram evāṣṭau narakān gacchati. viśiṣṭena mārgaṇa viśiṣṭam eti (f. 52r1 - 2)。【Catuspīṭhanibandha を参照した Catuspīṭhatantra 試訳】[意識が体外に遷移する]門である、眉間、臍、頭頂、目、鼻等、両耳、尿道、肛門、口の特徴[は以下の通りである]。臍[から意識が体外に出れば]欲界[の神として生まれる]。眉間[から意識が体外に出れば]色界の身体を有する[ものとして生まれる]。頭から[意識が遷移して]死んだ人は上方の場所にある領域に[赴く]。鼻から[意識が遷移すると]ヤクシャの世界[に生まれる]。両耳から[意識が遷移すると]シッダデーヴァの世界[に生まれる]。もし目から意識が遷移するならば人々の王[として生まれる]。口から[意識が遷移すると]餓鬼の[領域に生まれる]。同様に尿道から[意識が遷移すると]畜生の[領域に生まれる]。肛門から意識が[遷移すると]8つの地獄の領域に速やかに[赴く]。

Buddhaśrījñāna の主著である Dvikramatattvabhāvanā (いわゆる『大口伝書』)に utkrānti についての記述があり、navadvāra にも言及している。種村 2012b: 118 - 119, 註(8)を参照のこと。

仏教における navadvāra は Wayman 1973: 139 - 150 "The Nine Orifices of the Body"にまとめられている。

³⁹ 通常 yājaka は祭式を執行する司祭のこと。しかし、yājaka とはいわゆる「施主」(つまり死者の親族)を意味していると考えられる。この場合 yajamāna は死者であるが、祭式の実行を依頼することは不可能である。そこで代わりとなって謝礼を払い儀礼の執行を依頼する人が yājaka と表現されているのであろう。Tib.1 では shi 'brel (P f. 26v6, D f. 36r1)と訳されている。これは「死者の親類」という意味であろうか？

である⁴⁰。

次に皆を集めて(sarvaṃ saṃhṛtya), 施主に謝礼を要求すべきである。一方, 施主は, その財力に応じて, 衣, 装飾品, 床, 座具, 家, 土地, 女性の召使, 男性の召使などを謝礼として, 司祭に尊敬の念をもって与えるべきである。

[4] 葬送行進

次に, 死者の葬儀[を執り行う]人々の(mṛtasamṣkārajanānām)胸に(hṛdi) 3 文字[マントラ][= om hūṃ āḥ]が唱えられた聖紐を纏わせるべきである(paridhāpayet)。次に遺体を運ぶ人たちを世界の守護者(lokapālān)であると強く確信して, 日傘を持つ人を神の王[=インドラ]として, 仏子を持つ人をブラフマンとして, 剣を持つ人をヴィシュヌとして, 讃を唱える人をシヴァとして, 葬儀の実務を行う人を(ūrdhvadehikakriyākaram)ヤマとして, 瓶を持つ人をヴァルナとして, [ホーマに用いる]大勺, 小勺を持つ人をアグニとして, 固形の食事・液状の食事(bhakṣyabhojya⁴¹)を運ぶ人ナイルリティとして, 旗を持つものをヴァーユとして, 他の者たちをすべての神, アスラなどであると強く確信し, 次に百字マントラを7回唱えて, 自らの善を[死者の]正しい悟りに発展させ, 立ち上がるべきである。立ち上がったら, 持金剛を本性とし, すべての仏の父である金剛阿闍梨は, ローチャナーのマントラ, 『悪趣清浄タントラ(Durgatipariśodhanatantra)』に説かれたすべての悪しき存在領域を避けるマントラを[繰り返し]唱えながら, [葬列の]先頭を行くべきである。

21. [火葬場へと向かう]道において, 世界の守護者の集団に運ばれ, 導かれ, 讃えられている死体が絶えず神などにより供養されると観想すべきである。

22. 様々な楽器の音, 吉祥讃, 金剛歌, 鈴・真鍮製のシンバル(°kāṃsika°)・真鍮製の笛(°kāṃsīveṇu°)・琵琶などの音を伴い,

23. 5種の供物による供養, 天蓋(vitāna), 旗, そして日傘とともに多くの取り巻きを伴い(bahuparivāram)ゆつくりと火葬場へと

⁴⁰ 密教の儀礼において儀礼補助者が大乘經典を唱える例については, Tanemura 2004: 235, note 50 を参照。

⁴¹ bhakṣya と bhojya の違いについては Yagi 1994 を参照。

運ぶべきである(prāpayet)⁴².

[5] 火葬

24. そこ [= 火葬場]において点火用の薪となる枯れた乳木 (kṣīrendanaiḥ śuṣkaiḥ)とともに火葬用の薪を良く整えて(śubham) 並べ、そこに死体を載せ、瓶の水を[死体に]灌ぐべきである⁴³.

25. 次に規定に従って(vidhānayutena)[熾された]火により、[死体を]燃やすべきである⁴⁴. [死体が]灰になるまで相続人は(dāyādah) はしっかりと精神集中すべきである(susamāhitah)⁴⁵.

26. 先と同様に、大乘にして大いなる栄光のある経典を唱えさせ⁴⁶, 金剛歌を真鍮のシンバルとダマル太鼓を[敲き]ながら (kāṃsīḍamarukānugam)歌わせるべきである.

[6] 死者の悪しき存在領域からの救済

[6-1] 死者の骨などを叩く儀礼

さて、ある人々は、解脱の道に仕向けられていても、不善根がより多いから、ま

⁴² Tib.1 は以下の様に第 24 偈の tatra を第 23 偈に組み入れて訳している. nye bar spyod pa lnga yi mchod pa dang || bla re gos dang ba dan gdugs dang ni || 'khor mang ldan pas pha yi gnas su ni || dal gyis khyer te *phyin (P; *phyi* D) nas de ru ni || (P f. 27r7, D f. 36v1 - 2).

Tib.2 は vv. 22 - 23 を一つの散文として訳している(ただし、最後の部分は韻律をもった訳になっている). brdung dkrol sna tshogs pa'i sgra dang bkra shis kyi tshigs su bcad pa rnam dang | *rdo rje (D; *rdo rje*'i P) glu la sogs pa'i dril bu dang 'khar rnga dang *ting ting shag (D; *ting ting shag* or *ting ting sha ka?* P) dang | gling bu dang pi wang gi *sgra'i (D; *sgra* P) rje su 'brang bas nye bar spyod pa lnga mchod pa dang | ba dan dang *gos nam mkhar ldang ba (D; *gsan mkhar ldang ba?* P) dang | kun *tu (P; *du* D) bgo ba mang ldan pa | dal gyis pha yi gnas thob bya || (P f. 31r6 - 8, D f. 33r2 - 3). gos nam mkhar ldang ba (「空に広げられる布」の意味)は vitāna に相当するが, ātapatra は訳されていない.

⁴³ Tib.1 の第 24 偈は以下の様に citām と uparatam が訳されていない. 'o ma can gyi shing ni skam po yis || legs par rnam par *spras (D; *bkris* P) te brtsig par bya || de yi steng du de ni bzhag nas su || bum pa'i chu yis bsang bar bya ba yin || (P f. 27r7 - 8, D f. 34v2).

Tib.2 は kalaśavāriṇā を bum pa 'dzin pas と訳している. これは明らかに kalaśadhāriṇā と読み間違えたか、あるいは写本にそのような corruption があつた結果であろう. 結果として bum pa 'dzin pas bkru bar bya (P f. 31r8, D f. 33r4) 「瓶を持つ者に[水を]灌がせるべきである」と訳している.

⁴⁴ Tib.1 は第 25 偈の前半を以下の様に訳している. de nas sbyin sreg me yis ni || yongs su sbyang bar bya ba *ste (D; *sde* P) || (P ff. 27r8 - v1, D f. 36v3). 【和訳】「次にホーマの火により浄化するべきである」 Tib.1 は当該部分のサンスクリット語を pariśodhayet と読んだ可能性がある.

⁴⁵ Tib.1: ji ltar thal bar gyur gyi bar || shi 'brel mnyam par bzhag pas bsrung || (P f. 27v1, D f. 36v2 - 3). 【和訳】「灰になるまで死者の親族(?)は精神集中により守護すべきである(?)」

⁴⁶ 註 40 を参照.

た力を持っているから、悪しき道を進んでしまう。したがって、その悪しき道をも避けるために、その日から初めて 8 日間の間、『悪趣清浄タントラ』に説かれた規定に従い、悪しき存在領域の除去などの儀礼行為を行うべきである。その場合、[茶毘に付した死者の]骨が上がる間には彼の名前を唱えた後で、彼の衣に対して[その]儀礼行為を行うべきである。しかし、いったん骨が上がったら、8 日目まで骨と衣[両方]に対して[その儀礼行為を]行うべきである。

27. それらの[儀礼行為]においては、[マンダラの]南側に、四角形で、[一辺が] 1 ハスタで、[地面に]落ちていない牛糞を塗られた台を(vedīm)作り、牛から調達される[5 種類の]品を灌ぐべきである⁴⁷。

28. それ[が終了したら](tatra), 白檀を(arjunamalayajena)マンダラ [=先ほどの牛糞を塗られた台]に塗り、花で飾り、その上に[規定どおりの]特徴を備えた瓶を置くべきである⁴⁸。

29. [その瓶は、]五薬、五宝、五香、五穀を[内に]含み、[口に]小枝が差され、日傘と旗が飾られ、首の部分に青色の布が巻かれ⁴⁹、

⁴⁷ 第 27 偈の読みに関する emendation については種村 2013: 112 - 111, 註 31 を参照。種村 2013 の当該註に記していないが、Tib.1 は以下の様に訳しており、gavyaiḥ を pañcagavyaiḥ と読んでいる以外は、emendation を支持している。de yang lho'i char khru gang *ba'i (P; pa'i D) stegs bu gru bzhi pa byas te | ba lang gi lci ba sa la ma lhung bas byugs te ba'i rnam lngas kyang kun du bsang bar bya'o || (P f. 27v4 - 5, D f. 36v5 - 6)。

ここでの vedī, すなわち maṇḍalaka を作る場所は、emendation 前の写本の読みでは rajomaṇḍalasya dakṣiṇabhāge と規定されている。しかしながら、rajomaṇḍala の作成は先立つ箇所では規定されていない。Agrabodhi 著の *Mañjuśrīmaṇḍalavidhiguṇasambhava* の規定する葬送儀礼では、マンダラの南側に pañcagavya により maṇḍala を作成することが規定されている。但し、この規定は火葬後のものではなく、火葬前の遺体に灌頂を受ける際の規定である。dkyil 'khor gyi lho phyogs su ba'i rnam lngas maṇḍala byas la de'i steng du ro bzhas ste | slob ma dkyil 'khor du gzhug pa'i tshul du ro de dkyil 'khor du gzhag par bya'o || gsol ba gdab pa dang | bsod nams kyi tshogs bsags pa dang | ye shes dbab pa dang | dkyil 'khor du me tog dor te | gdong g-yogs *dkrol (D; dkrol P) ba dang | dkyil 'khor du bcug la lha ngo bstan pa dang | rig pa'i dbang dang gsang ba'i dbang bskur ba la sogs pa ste dbang rnams rdzogs par bskur bar bya'o || (P ff. 121v7 - 122r1, D ff. 103r1 - 2)。桜井 2007: 162 および 176, 註 12 参照。

⁴⁸ Tib.2 は第 28 偈を以下の様に散文で訳している。der nye bar byugs nas dkyil 'khor byugs pa'i dri ma me tog la gnas par bya'o || de'i steng du bum pa mtshan nyid dang ldan pa dgod de | (P f. 31v4 - 5, D f. 33r7 - 33v1)。Tib.2 がこの詩節の前半部をどのように解釈したのか不明である。

⁴⁹ この詩節の emendation に関しては種村 2013: 111, 註 32 を参照。また密教儀礼に使用する瓶とその内容物に関しては桜井 1996: 付篇 III, 特に pp. 592 - 594 註(10)を参照。Tib.1 の第 1, 2 pāda は以下の様に pallava が瓶の中に入れられる品のように訳されている。sman dang yal ga nor bu dri bzang dang | 'bru rnam lnga dang yang dag ldan par ni || (P f. 27v6, D f. 36v6 - 7)。Tib.2 は以下の様にこの詩節を散文で訳している。sman dang yal ga dang nor bu dang dri dang | 'bru lnga dang yang dag par ldan pa gdugs dang ba dan gyis brgyan pa | mgrin par gos sngon po dang ldan pa | (P f. 31v6 - 7, D

30. 供養のための五品⁵⁰が供えられ、良く薫じられ、内側には聖地⁵¹の水が入れられ、ダルバ草で作られた座に置かれ、部族主⁵²のシンボルで印がつけられており、大きい⁵³.

31. 次にマントラ行者は, [om āḥ hūṃ という]3 つの文字を伴った, [ヴァジラ]ヤクシャのマントラ⁵⁴, あるいは洗浄のためのマントラを(kṣālamantreṇa)108 回その[瓶]に対して[唱え], 瓶を[儀礼で使用するよう]準備すべきである⁵⁵.

次に前に白い粉末で、こしき・リムを備えた(sanābhikaṃ sanemikam)八輻の輪を炎の上に(sajvālakam)描き, [その上に]白い花を撒き散らし, その[輪の]中央に[置いた]空になった瓶の上に浅い皿を置くべきである⁵⁶.

32. その次に, 彼[=死者]の骨をその[皿の]上に, 余すことなく置くべきである. 三三昧を修した[司祭]は, その[死者]に対する悪

f. 33v1). Tib.2 でも pallava が瓶の内容物のように訳されている. Tib.1 および Tib.2 「5 (Inga)」の位置を見る限り, *Mṛtasugatiniyojana* の 2 写本に見られる kṛtapallava- という読みを支持する可能性は低いと考えられる.

⁵⁰ Tib.1 では pañcopahārasahitam の upahāra のみ, v.29 の第 4 pāda の中に訳されている. Tib.1 29d - 30a: gdugs dang ba dan btsugs te *nyer sbyod ni (D; nye sbyod ni P) || Inga dang bcas pas dri bzang gis bdugs shing || (P f. 27v6 - 7, D f. 36v7).

⁵¹ Tib.1 の訳は bsti gnas (P f. 27v7, D f. 36v7). TSD では āsrama や maṭha などの訳語として収録されている.

⁵² ここでいう部族主が死者の iṣṭadevatā の部族主であるか, あるいはローチャナーの部族主であるか判然としない. あるいは単数で表現されているが, *Durgatipariśodhana* マンダラの尊格に対応する瓶を用意し, それぞれの部族主のシンボルで印をつけるという可能性も考えられる.

⁵³ 第 30 偈のテキスト上の問題と emendation については種村 2013: 111, 註 33 を参照.

⁵⁴ Tib.1 は rtša ba yi sa bon gyis (P f. 27v7, D f. 37r1)で mūlabijena と読んでいる. この読みは *Ācāryakriyāsamuccaya* の読みと一致する. Tib.2 は rtša ba'i sa bon gyi sngags と訳している. 註 55 を参照.

⁵⁵ Tib.2 は第 30 - 31 偈を以下の様に散文に訳している. nye bar skyod pa Inga dang bcas pa | legs par sdug pa | 'bab stegs kyi chu dang ldan pa | ku sha 'khyil pa byas pa'i gdan la gnas pa | rigs kyi bdag po'i rtags kyis mtshan pa | rgya chen po lhag par gnas par byas | yi ge gsum dang ldan pa'i rtša ba'i sa bon gyi sngags lan brgya rtša brgyad kyis bkru'o || (P f. 31v7 - 8, D f. 33v1 - 2). adhivāsayet の前後で文を分け, kṣālanamantreṇa の kṣālaṇa-を第 31 偈の tatas tam 以降の部分の動詞のように訳している. (サンスクリット語写本は両者とも adhivāsayet の前ではなく, 後に daṇḍa が挿入されている.) 実際には, 第 29 - 30 偈は, 第 28 偈の lakṣaṇopetam の具体的な内容を記述しており, 第 31 偈では, マントラを唱えてそのような特徴を備えた瓶を準備せよ, ということを述べている. legs par sdug pa 「とても美しくされた」または「とても悲嘆した」は legs par bdug pa 「良く薫じられた」の誤記であろうか.

⁵⁶ Tib.1 はこの文を 6 pāda からなる韻文で訳している. de nas mdun du rdul tshon dkar po yis || lte bar bcas shing mu khyud 'od dang bcas || 'khor lo rtsibs brgyad bris nas me tog ni || dkar pos mdzes par rnam par spras nas ni || de yi dbus gzhag snod ni stong ba yi || steng du bug pa dang bcas kham skyong *gzhag (D; bzahg P) || (P f. 27v8 - 28r1, D f. 37r1-2).

しき効果の阻止を(pratyāṅgirām)⁵⁷を行うべきである⁵⁸.

33. 順番に金剛歌と(pavivācā)マントラを唱えながら、彼の[=死者の]骨、衣、あるいは名前を花とともに白芥子で叩くべきである。

そこで、マントラの語句は以下のとおりである⁵⁹.

- (1) オーム。金剛のように、すべての罪を焼くものよ。フーム。
- (2) オーム。金剛のように、すべての罪を除去するものよ。フーム。
- (3) オーム。行為による障害を灰にせよ。フーム、パット。
- (4) オーム。ブルーム。障害を消し去れ。フーム、パット。
- (5) オーム。ブルーム。障害を除去せよ。フーム、パット。
- (6) オーム。燃え上がれ、燃え上がれ、障害を壊せ、壊せ、破壊

⁵⁷ 文脈から判断して、第 33 偈に述べられていることが pratyāṅgirā の具体的な内容であると思われる。すなわち、マントラを唱えながら死者の骨などに白芥子を投げつけることによって、罪や傷害が死者に悪しき効果を及ぼすことを避けることであると考えられる。Cf. *Mañjuśrīyamūlakalpa* (*Mañjuśrīmūlakalpa*), chapter 55: nityajāpena pratyāṅgirā. padmasūtrādīnā aṣṭasahasrābhimantritena yasya haste badhnāti tasya rakṣā kṛtā bhavati (vol. 3, p. 682, ll. 11 - 13).

⁵⁸ Tib.2 は第 32 偈を以下の様に散文で訳している。de'i rjes la kham phor der de'i rus pa ma lus pa bzhaḡ go || tin nge 'dzin gsum bsgoms pas phyir bzlog kyang bya'o || (P f. 32r1 - 2, D f. 33v3 - 4). pratyāṅgirām に相当する部分がない。

⁵⁹ Tib.1 及び Tib.2 は(1) - (15)のマントラを以下の様に読んでいる。Tib.1: (1) om sa rba pā paṃ da ha na ba dzra hūṃ phaṭ | (2) om sa rba pā paṃ bi sho dha na hūṃ phaṭ | (3) om sa rba ka rma *ā ba ra ṇi (D; a pa ra ṇi P) bha smiṃ ku ru hūṃ phaṭ | (4) [Not existant] (5) om bhrūṃ bi sho dha ya *ā ba ra ṇā ṇi (D; a ba ra ṇi ṇi P) hūṃ phaṭ | (6) om dzwa la dzwa la dha ka dha ka ha na ha na *ā ba ra ṇā ṇi (D; a [ba ra] ṇā ṇi P) hūṃ phaṭ | (7) om sruṃ sa ra sa ra *ā ba ra ṇā ṇi (D; ā pa ra ṇā ṇi P) hūṃ phaṭ | (8) om hūṃ *ha ra ha ra (D; ha ha ra ha ra P) sa rba *ā ba ra ṇā ṇi (D; a ba ra ṇā ṇi P) hūṃ phaṭ | (9) om hūṃ phaṭ sa rba *ā ba ra ṇā ṇi (D; a ba ra ṇā ṇi P) spho ṭa ya hūṃ phaṭ | (10) om bhr̥ ta bhr̥ ta sa rba *ā ba ra ṇā ṇi (D; a pa ra ṇā ṇi P) hūṃ phaṭ | (11) om *trā ṭa trā ṭa (D; tra ṭa tra ṭa P) sa rba *ā ba ra ṇā ṇi (D; a pa ra ṇā ṇi P) *hūṃ phaṭ (D; traṃ hūṃ phaṭ P) | (12) om *tstshi nda tstshi nda (D; tshi ndha tshi ndha P) sa rba *ā ba ra ṇā ṇi (D; a pa ra ṇā ṇi P) hūṃ phaṭ | (13) om da ha da ha sa rba na ra ga ti *he tuṃ (D; he tu P) hūṃ phaṭ | (14) om pa tsa pa tsa sa rba pre ta ga ti he tuṃ hūṃ phaṭ | (15) om ma tha ma tha sa rba *ti ryak ga ti (D; ti rya ga ti P) he tuṃ hūṃ phaṭ | (P f. 28r3 - 6, D f. 37r4 - 37v6); Tib.2: (1) om sa rba *pā pa (P; pā paṃ D) *da ha na (D; da ha naṃ P) ba dzra hūṃ phaṭ | (2) om sa rba *pā pa (P; pā paṃ D) bi sho dha na hūṃ phaṭ | (3) om sa rba *ka rma ā bar a ṇā ṇi (P; ka rmā a ba ra ṇā ṇi D) bha smi ku ru hūṃ phaṭ | (4) om *bhrūṃ (D; bhrū P) bhrūṃ bi nā shā ya ā ba ra ṇā ṇi dzaṃ hūṃ phaṭ | (5) om bhrūṃ bi sho dha ya ā ba ra ṇā ṇi hūṃ phaṭ | om sa rba ka rma *ā ba ra ṇā ṇi (D; ā ba rā ṇā ṇi P) hūṃ phaṭ | (6) om dzwa la dzwa la dha ka dha ka ha na ha na *ā ba ra ṇā ṇi (D; ā pa ra ṇā ṇi P) hūṃ phaṭ | (7) om sruṃ sa ra sa ra pra sa ra pra sa ra ā ba ra ṇā ṇi hūṃ phaṭ | (8) om hūṃ ha ra ha ra sa rba ā ba ra ṇā ṇi hūṃ phaṭ | (9) om hūṃ sa rba ā ba ra ṇā ṇi spho ṭa ya hūṃ phaṭ | (10) om bhr̥ ta bhr̥ ta sa rba ā ba ra ṇā ṇi hūṃ phaṭ | (11) om trā ṭa trā ṭa sa rba ā ba ra ṇā ṇi hūṃ phaṭ | (12) om *tshi nda tshi nda (P; tstshi nda tstshi nda D) | sa rba ā ba ra ṇā ṇi hūṃ phaṭ | (13) om da ha da ha sa rba na ra ka ga ti he tuṃ hūṃ phaṭ | (14) om *pa ca pa ca (P; pa tsa pa tsa D) sa rba pre ta ka ti he tuṃ hūṃ phaṭ | (15) om ma tha ma tha sa rba *ti ryag (P; tī ryak D) ga ti he tuṃ hūṃ phaṭ | (P f. 32r3 - 7, D f. 33v4 - 7).

せよ、破壊せよ、フーム、パット。

(7) オーム。スルーム。去れ、去れ。立ち去れ、立ち去れ。障害
よ。フーム、パット。

(8) オーム。すべての障害を取り去れ、取り去れ。フーム、パッ
ト。

(9) オーム、フーム、パット。すべての障害を打ち壊せ。フーム、
パット。

(10) オーム。ブリタ、ブリタ。すべての障害を。フーム、パッ
ト。

(11) オーム。トゥラタ、トゥラタ。すべての障害を。フーム、
パット。

(12) オーム。すべての障害を切れ、切れ。逃げ出せ、逃げ出せ。
すべての障害よ。

(13) オーム。地獄という存在領域の原因を焼け、焼け。フーム、
パット。

(14) オーム。餓鬼という存在領域の原因を料理せよ、料理せよ。
フーム、パット。

(15) オーム。畜生という存在領域の原因を粉碎せよ、粉碎せよ。
フーム、パット。

以上が骨などを叩く儀礼である⁶⁰。

[6-2] 骨などを洗淨する儀礼

[先に]準備された瓶の水により、マントラを唱えながら彼[=死者]の骨などを洗う
べきである。マントラ[は以下の通りである]⁶¹。

オーム。世尊、すべての悪い存在領域を除去する王、如来、阿羅

⁶⁰ Tib.1 は ces bya ba ni rus pa la sogs pa la brdeg pa'i sngags so (P f. 28r6 - 7, D f. 37v6)とあり, *Ācāryakriyāsamuccaya* の ity asthyāditādanamantraḥ の読みに一致する。Tib.2 は *ces (D; zhes P) pa ni rus pa la sogs pa la me tog brdeg pa'i sngags so (P f. 32r7, D f. 33v7)とあり, me tog が加わっている。種村 2013: 100, 註 37 も参照のこと。

⁶¹ Tib.1 は以下の様に訳している。de nas lhag gnas byas pa'i bum pa'i chus de'i rus pa la sogs pa brjod bzhin du bkru ba'i sngags ni (P f. 28r7, D f. 37r6)。このチベット語訳からは「マントラを唱えながら骨などを洗う」とは解釈できない。

漢，正覺者に帰依します。すなわち，オーム．除去する者よ，除去する者よ，よく除去する者よ，よく除去する者よ，[障害が]除去された者よ，よく浄化された者よ，すべての行為による障害が除去された者よ，スヴァーハー⁶²．

以上が骨などを洗うマントラである．

[6-3] 存在領域の教示と道程の浄化

⁶² このマントラはいくつかの細かいヴァリエントを伴って *Sarvadurgatipariśodhanatantra* の数カ所に説かれている．*oṃ *śodhane śodhane* (*S_{ED}*; *śodhani śodhani T_{ED}*) *sarvapāpaviśodhani śuddhe viśuddhe sarvakarmāvaraṇaviśuddhe svāhā*, *asyā vidyāyā bhāṣaṇāntaram eva sarvasattvānām *durgatir vinipātītā* (*S_{ED}*; *durgativinipātītā T_{ED}*), *sarvanarakatiryakpretagatiḥ *śodhitā* (*S_{ED}*; *śāntā T_{ED}*), *tīvraduḥkhāni praśāntāni, bahavaś ca jātāḥ *sukhamukhībūtāḥ* (*T_{ED}*; *sukhīmukhībūtāḥ S_{ED}*) (*S_{ED}* p. 126, ll. 12 - 16, 高橋 1985a: 952.2 - 6). 【和訳】「オーム．除去する者よ，除去する者よ．すべての罪を除去する者よ．[障害が]除去された者よ．スヴァーハー．この明呪が唱えられるや否や，すべての衆生の悪しき存在領域が破壊され，すべての地獄・畜生・餓鬼という存在領域が除去され，激烈な苦が取り払われ，多くの者たちが楽を実現することになる．」 *punar aparāṃ devendra saṃkṣepataḥ smaraṇamātreṇāpy alpapuṇyasattvānām sarvadurgatīśāntikaraṇāyānāyāsato vimokṣakaram idam bhavati*. *oṃ namo bhagavate sarvadurgatipariśodhanarājāya tathāgatāyārhate samyaksambuddhāya tadyathā oṃ *śodhane śodhane* (*S_{ED}*; *śodhani 2 T_{ED}*) *sarvapāpaviśodhani śuddhe viśuddhe sarvakarmāvaraṇaviśodhani svāhā*. *mūlavidyā* (*S_{ED}* p. 126, ll. 24 - 30, 高橋 1985a: 951.9 - 16). 【和訳】「またさらに，神の王よ，簡潔に念想するだけでも，福德の少ない衆生たちのあらゆる悪しき存在領域を取り払うために，以下の[明呪]は簡単に[衆生たちを罪から]解放する．「オーム．世尊，すべての悪い存在領域を除去する王，如来，阿羅漢，正覺者に帰依します．すなわち，オーム．除去する者よ，除去する者よ．すべての罪を除去する者よ．[障害が]除去された者よ，よく除去された者よ．すべての行為による障害を除去する者よ．スヴァーハー．」これが根本の明呪である．」

上述の引用においてこの *vidyā* の効果は悪趣を取り除くことであるとしている．また，上記以外にも類似の *vidyā* が説かれている．*oṃ namaḥ sarvadurgatipariśodhanarājāya tathāgatāyārhate samyaksambuddhāya tadyathā oṃ śodhane śodhane *sarvapāpaviśodhane* (*T_{ED}*; *sarvapāpaśodhani S_{ED}*) *śuddhe viśuddhe sarvakarmāvaraṇaviśuddhe svāhā* (*S_{ED}* p. 148, ll. 24 - 27; 高橋 1984b: 461.7 - 10); *oṃ namaḥ sarvadurgatipariśodhanarājāya tathāgatāyārhate samyaksambuddhāya tadyathā oṃ śodhane śodhane sarvapāpaviśodhane śuddhe viśuddhe sarvakarmāvaraṇaviśuddhe svāhā* (*S_{ED}* p. 156, ll. 30 - 33; 高橋 1984b: 437.9 - 12); *oṃ namaḥ sarvadurgatipariśodhanarājāya tathāgatāyārhate samyaksambuddhāya tadyathā oṃ śodhane śodhane *sarvapāpaviśodhane śuddhe viśuddhe* (*S_{ED}*; *n.e. T_{ED}*) *sarvakarmāvaraṇaviśuddhane svāhā* (*S_{ED}* p. 162, ll. 21 - 24; 高橋 1985b: 213.4 - 6); *oṃ namaḥ sarvadurgatipariśodhanarājāya tathāgatāyārhate samyaksambuddhāya tadyathā oṃ śodhane śodhane sarvapāpaviśodhane śuddhe viśuddhe sarvakarmāvaraṇaviśuddhe svāhā* (*S_{ED}* p. 172, ll. 2 - 5; 高橋 1986: 117.2 - 5). またこの *vidyā* に関してはギープル 1993: 152ff. も参照されたい．

Tib.1 と Tib.2 はこのマントラをそれぞれ以下のように読んでいる．Tib.1: *oṃ na mo bha ga ba te sa rba du rga ti* (D; *pa ri sho dha ne P*) *rā dzā ya | *ta thā ga tā ya* (D; *ta thā ga ta ya P*) *a rha te saṃ mya ksaṃ bu ddhā ya | ta dya thā | oṃ sho dha ne sho dha ne sa rba pā paṃ bi sho dha ne shu ddhe bi shu ddhe sa rba ka rma *ā ba ra ṇa* (D; *a ba ra na P*) *bi sho dha ni swā hā |* (P f. 28r7 - 8, D f. 37r6 - 7); Tib.2: *oṃ na mo bha ga ba te sa rba du rga ti *pa ri sho dha na* (P; *pa ri sho dha ni D*) **rā dzā ya* (D; *ra dza ya P*) *ta thā ga tā ya a rha te | sa mya ksaṃ bu ddhā ya | ta dya thā | oṃ sho dha ne sho dha ne | sa rba pā pa* (P; *sa rba pā paṃ D*) *bi sho dha ne | shu ddhe bi shu ddhe | sa rba *ka rma* (D; *n.e. P*) **ā ba ra ṇa ni* (D; *ā ba ra ṇa ni P*) *bi shu ddhe swā hā |* (P f. 32r8 - 32v1, D f. 33v7 - 34r1).

次に、花を投げ、マントラを唱えながら、マントラ行者[=司祭]は、[死者に]道程を示すべきである。

オーム。宝よ、宝よ。宝より生じる者よ。宝の光を持つ者よ。宝の連なりにより浄化された者よ。すべての罪を取り除け。フーム、パット⁶³。

存在領域を示すマントラである。

花と水をまき、道程を浄化すべきである⁶⁴。マントラ[は以下の通りである]。

オーム。蓮華よ。蓮華より生じる者よ。[死者は]極楽へ行け。トゥラート、スヴァーハー⁶⁵。

以上が道程を浄化するマントラである。[以上の場合、]マントラのもろもろの語句に[行為を]促す言葉⁶⁶をつけるべきである (*tatra mantrapadeṣu codanapadam*

⁶³ このマントラは、若干異なる点があるが、*Sarvadurgatipariśodhanatantra* に説かれるものである。 *atha khalu bhagavān punar api sarvāvaraṇavimalaviśuddhivajraṃ nāma samādhiṃ samāpadyemāṃ sarvatathāgatāśeṣāvaraṇavināśanīm nāma hr̥dayadhāraṇīm svahr̥dayād niścacāra. oṃ ratne ratne mahāratne ratnasambhave ratnakirāṇe ratnamālāviśuddhe śodhaya sarvapāpaṃ *hūṃ* (em.; *hūṃ* S_{ED}) *phaṭ. asyāṃ bhāṣitamātrāyāṃ sarvamārabhavanāni dhvastāni vidhvamsitāny abhūvan* (S_{ED} p. 188, ll. 26 - 32)。【和訳】「次に世尊は、今度は「金剛のようにすべての障害を無垢にし取り除く」という三昧に入り、以下の「すべての如来によるあらゆる障害の破壊」という心髄のダーラニーを自らの心臓から放出した。「オーム。宝よ、宝よ。大いなる宝よ。宝より生じる者よ。宝の光を持つ者よ。宝の連なりにより浄化された者よ。すべての罪を取り除け。フーム、パット。」

Tib.1 と Tib.2 はこのマントラを以下の様に読んでいる。 Tib.1: *oṃ ra tne ra tne ratna saṃ bha be *ra tna ki ra ṇe* (D; *ra tna ki ra ṇe* P) **ra tna mā li* (D; *ra tna mā la* P) **bi shu ddhe shodha ya* (D; *bi shu ddha shu ddha ya* P) | *sa rba pā paṃ hūṃ phaṭ* | (P f. 28v1, D f. 37r7 - 37v1); Tib.2: *oṃ ra tne ra tne ra tna sa mbha be* | *ra tna ki ra ṇe* | *ra tna mā la bi shu ddhe* | *sho dha ya* | *sa rba pā paṃ hūṃ phaṭ* | (P f. 32v2, D f. 34r2)。

⁶⁴ Tib.1 は *de nas tog chu nang du dor te lam sbyar bar bya'o* (P f. 28v1 - 2, D f. 37v1) とある。 *nang du* が何を訳しているかは不明。

⁶⁵ このマントラの出典は不明である。チベット語訳はこのマントラを以下の様に読んでいる。 Tib.1: *oṃ pa dme pa dme mahā pa dme *pa dma saṃ bha be* (D; *pa dme saṃ bha be* P) *su kha ba ti ga tstshaṃ tu swā hā* | (P f. 28v2, D f. 37v1); Tib.2: *oṃ pa dme pa dme pa dmo dbha be su khā ba tyaṃ *ga tstsha tu* (P; *ga tstshaṃ tu* D) *swā hā* | (P f. 32v3, D f. 34r2)。

⁶⁶ この *codanapada* とは具体的には上記マントラ中の *gacchatu* という動詞の命令形を指すと考えられる。 Cf. *Guhyasamājatantra* 15.80: *śatroḥ pratikṛtiṃ kṛtvā nadīśrotobhayor api | tilamātram api sarvāṅgaṃ kaṇṭakair viśasambhavaiḥ | pūrayec codanapadair dhruvaṃ buddho 'pi naśyati ||* (M_{ED} p. 77); *Pradīpoddhyotana* ad loc.: *śatror ityādi. nadīśrota iti paścimasamudragāminī nadī tasya ubhayataṭamrttikāṃ saṃgrhya śatrupratikṛtiṃ kṛtvā śṛṅgīviśādikair madanakāṇṭakair saṃkocādiviśasarpakaṇṭakair vā tilabījamātram antarīkṛtya pratidehaṃ pūrayan nikhanen amukaṃ mārāya phaṭ iti codayan. dhruvaṃ buddho 'pi naśyati* (C_{ED} p. 174, ll. 4 - 7)。【*Pradīpoddhyotana* 和訳】「敵の」で始まる[偈頌について説明する]。「川の流れ」の川とは西の海に行く川である。その[流れの]兩岸の土を集めて敵の人形を作り、*śṛṅgī* の毒などの中毒を引き起こすもと、あるいは[身体]の収縮など[を引き起こす]毒蛇[の毒]といった苦痛の原因を胡麻の実の大きさにして[土で作った人形の中に]入れ、それぞれの身体を[毒で]満たしつつ、「某を殺せ！」と促しつつ、[地中に]埋めるべきである。仏であっても必ず滅する。」

dadyāt)⁶⁷.

34. 道程を浄化するマントラを唱えながら花を雨降らせるべきである。尊格と合一した(samāhitah)[司祭]は、吉祥な頌を唱えるか、あるいは[儀礼補助者に]唱えさせるべきである⁶⁸。

35. 毎日[夜明け、正午、夕暮れの]三時に、あるいは[それらのうちの]一時に[上記の諸儀礼を]行うべきである。先に述べられた通りの規定に従い、供養を行い、皆を集めるべきである⁶⁹。

[6-4] 吉祥讃

その場合の吉祥頌は[以下の通りである]。

36. すべての有情の利益を喜び、過失を欠き、智が浄化されており、智慧の身体との結合[=配偶者の女尊との結合]により輝き⁷⁰、安樂を本質とする仏の吉祥が最上の灌頂において汝にあれかし⁷¹。

37. その[仏]により語られ、神、人、アスラにより供養され、無上であり、三世界において知れ渡っている、無自性であるダルマの吉祥が最上の灌頂において汝にあれかし⁷²。

⁶⁷ Tib.1 および Tib.2 とともに sngags kyi tshig de dang de la (Tib.1: P f. 28v2, D f. 37v2; Tib.2: P f. 32v3, D f. 34r3) とあり、*Ācāryakriyāsamuccaya* の tatra tatra mantrapadeṣu の読みを支持している。種村 2013: 110, 註 41 も参照のこと。

⁶⁸ Tib.1 は第 34 偈を以下の様に散文で訳している。lam sbyang ba'i sngags kyis me tog gi char dbab par bya'o || mnyam par gzhas par bya'o || bkra shis kyi tshigs su bcad pa len nam len du gzhus par bya'o || (P f. 28v3, D f. 33v2)。Tib.1 が geyān maṇalagāthās ca gāpayed vā をどのように解釈したのか不明である。Tib.2 は第 34 偈を散文と韻文の折衷で訳している。lam sbyang ba'i sngags kyis me tog gi char dbab par bya'o || glu mkhan bkra shis tshigs bcad ni || mnyam par bzhas pas glur blang bya || (P f. 32v3 - 4, D f. 34r3)。詩節の後半を「歌い手は尊格と合一して吉祥な頌を唱えるべきである」と訳している。

⁶⁹ Tib.1 は第 35 偈を以下の様に散文で訳している。de ltar nyin re bzhin du thun gsum mam gcig tu bya'o || de bzhin du yang dag par mchod de | ji ltar bstan pa'i cho ga thams cad bsdu bar bya'o || (P f. 28v3 - 4, D f. 37v2 - 3)。

⁷⁰ これはおそらく光明(prabhāsva)の状態にあることを言っているのであろう。

⁷¹ Tib.1 は第 4 pāda を bkra shis de yis khyed rnams la ni dbang mchog bskur (P f. 28v5, D f. 37v4) と訳しており、「最上の灌頂において汝たちにあるように」と二人称を複数形に解釈している。以下の二つの吉祥讃においても同様である。Tib.2 は第 3, 第 4 pāda をそれぞれ以下の様に訳している。shes rab yan lag la 'khyud bde mdzes pa'i bdag nyid can (P f. 32v6, D f. 34r5)。【和訳】「智慧の身体の抱擁[による]安樂の輝きを本質とする」。de yis khyod la dbang bskur mchog gi bkra shis 'byung bar shog || (P f. 32v6 - 7; D f. 34r5)。【和訳】「その[仏]により、汝に最上の灌頂の吉祥が生じるように」。この第 4 pāda の訳は、他 2 つの吉祥偈にも共通している。

⁷² Tib.1 のデルゲ版および北京版の第 2, 3 pāda はそれぞれ以下の様に読んでいる。D1: de yis bstan pa'i dam chos bla na med pa ni || bdag med 'jig rten gsum *la (em.; las D) rab tu grags pa yi || (f. 37v4);

38. [その]すぐれたダルマを常に保持し, [それ故に]良き段階にあり [=菩薩の十地に到達しており], 有情を助けることに長けている, 非常に吉祥で善なる勝者の息子[=菩薩]の集団の吉祥が最上の灌頂において汝にあれかし.

以上の吉祥頌を, 骨を洗う時にもまた, [自ら]唱えるか, あるいは[儀礼補助者に]唱えさせるべきである. そこで[尊格を]送り出すマントラ[は以下の通りである].

39. オーム. あなたがたによりすべての衆生の利益がなされ, ふさわしい成就が与えられた. 再びやってくるために, 仏の領域へとお帰りください. ムッフ⁷³.

[6-5] 親類による司祭への謝礼

次に, 夜にガナチャクラを行い, 皆を集めるべきである. もし可能ならば⁷⁴, 規定に従い悪趣清浄マンダラを作り, 先に述べられたとおりに儀礼を行うべきである. また加えて, 相続人⁷⁵に謝礼を要求すべきである⁷⁶. 彼[=相続人]もまた財力に応じて[謝礼を]与えるべきである. 洗淨済みの衣を同じ司祭に与えるべきである. [以下の様に]説かれている.

P2: de yis bstan pa'i dam chos bla na med bdag med || 'jig rten gsum *la (em.; las P) rab tu grags pa yi (f. 28v6)とある. 北京版では med pa の pa から bdag med の b-まで eyeskip が起こったと考えられる.

⁷³ 尊格の送り出しの偈頌の初出はおそらく *Sarvatathāgatatattvasaṃgraha* であろう. *Sarvatathāgatatattvasaṃgraha*: om, kṛto vaḥ sarvasattvārthaḥ siddhir dattā yathānugā | gacchadhvaṃ buddhaviṣayaṃ *punarāgamanāya (em.; *punar āgamanāya* H_{ED}) tu || vajrasattva muḥ (H_{ED} §.317). この偈頌は幾つかの variant (と corruption)を伴って, 様々なテキストに伝承されている. E.g. *Muktāvalī* ad *Hevajratantra* 1.8.24: om, kṛto vaḥ sarvasattvārthaḥ siddhir dattā yathānugā | gacchadhvaṃ buddhaviṣayaṃ punarāgamanāya tu || om mur iti (MS N f. 55r4 - 5; MS T folio missing; S_{ED} p. 86, ll. 19 - 21); *Kriyāsaṃgrahapañjikā* (*devatāyoga*): om, kṛto vaḥ sarvasattvārthaḥ *siddhir dattā yathānugā (em.; *siddhin datvā yathānurāgāḥ* I_{ED}) | gacchadhvaṃ buddhaviṣayaṃ punarāgamanāya tu || om vajrasattva muḥ. om vajra muḥ (Inui 1994: 92.16 - 19); *Siddhaikavīrasādhana*: kṛto vaḥ sarvasattvārthaḥ siddhir dattā yathānugā | gacchadhvaṃ buddhaviṣayaṃ punarāgamanāya muḥ || (vol.1, p. 138, ll. 20 - 21).

Tib.2 はこの詩節を以下の様に訳している. om (◌) khyed kyis sems can don kun mdzad || rjes su mthun pa'i dngos grub stsol || slar yang 'byon par mdzad slad du || sangs rgyas yul du gshegs su gsol || muḥ zhes pa'o || (P f. 33r2 - 3, D f. 34r7 - 34v1). muḥ が詩節の外に訳されている.

⁷⁴ Tib.1 は'byor pa yod na (P f. 29r2, D f. 37v7)「もし財力があるならば」と意識している. 'byor pa を sbyor ba と読み替えるならばサンスクリットと一致する. おなじく Tib.2 は' byor *ba (D; pa P) ci yod pas (P f. 33r4, D f. 34v1)とあるが, これも'byor を sbyor に読み替えればサンスクリットと一致する.

⁷⁵ Tib.2 は相続人(dāyāda)を sbyin bdag 「施主」(P f. 33r4, D f. 34v2)と訳している.

⁷⁶ Tib.1 は blang bar bya'o (P f. 29r2, D f. 38r1)「受け取るべきである」と訳している.

40. 死者のために、[死者]自身の親類たちが司祭に与えたものは、
「彼に与えられた」と知られるべきであり、それが死者に対する
餞である⁷⁷.

41. 7日[目]より以前に、何かしらのものが彼[=死者]の吉祥を求
める[親類たち]により[司祭に]与えられるべきである⁷⁸. その布施
により、必ず彼[=死者]は極楽へと赴くであろう⁷⁹.

42. 以上のように、規定に従って死者に対して葬儀に関してなす
べきことすべてをなせば、その死者は必ずすべての悪行を捨て、
極楽へと赴く⁸⁰.

[6-6] 骨をまく

43. 次に彼[=司祭]は、浄化された彼[=死者]の骨を石を使って非
常に細かい粉末にして⁸¹、供養[の品]をもって礼拝した後で、非
常に大きく広い川に運ぶべきである⁸².

44. あるいは大きな山のひとときわ高い(uccatarāṃ)頂に
(śikharakoṭim)登り、巻き上げる風の流れにより
(parivātimarudvegāt⁸³)、その[風の]吹くままに(tadanukūlena)それ

⁷⁷ Tib.2はこの詩節を以下の様に訳している. ro la dmigs nas gnyen rnams kyis || slob dpon la ni gang byin pa || de ni mtho ris la bzhas pas || de la sbyin par shes par bya || (P f. 33r5 - 6, D f. 34v3). pātheyam が訳されていない.

⁷⁸ この詩節の前半部は Tib.1 では訳されていない.

⁷⁹ Tib.2はこの詩節を以下の様に訳している. nyi ma bdun nas rab bshad pa'i || de yis ci 'dod nor dbul bya || de la byin pas nges par ni || bde ba can du mchod par 'gyur || (P f. 33r6, D f. 34v3 - 4).【和訳】「7日から語られた、彼によって望まれたどのような財も与えられるべきである. 彼に対する布施により、必ず天界で供養される」

⁸⁰ Tib.2はこの詩節を以下の様に訳している. gang phyir bsam gtan bya ba kun || cho gas lus ni *steng (P; stong D) byas nas || sdiḡ pa ma lus spangs nas ni || bde ba can du nges par gnas || (P f. 33r7, D f. 34v4). 訳語に bsan gtan (*dhyāna)が含まれている理由が不明である.

⁸¹ Tib.1は zhib mor rdo la btags nas ni (P f. 29vr5, D f. 38r3)「細かく石にして(?)」と訳している.

⁸² Tib.2はこの詩節を以下の様に訳している. de rjes de yi rus pa rnam dag pa || phye ma shin tu *zhib par (P; zhib bar D) byas nas ni || mchod pas yang dag mchod nas 'bab chu ni || shin tu rgya cher rab tu dor bar bya || (P f. 33r7 - 8, D f. 34v4 - 5). śīlayā が訳されておらず、pravāhayetを「投げ入れるべきである(rab tu dor bar bya, *prakṣipet)」と訳している.

⁸³ この複合語は parivartimarudvegāt と emendすべきであろうか? Tib.2にある yongs su rgyu ba (P f. 33v1, D f. 34v5)はこの emendation の可能性を支持しているかもしれない. Tib.1に関しては註84を参照.

[＝骨の粉末]を撒くべきである⁸⁴.

45. もし非常に恐ろしい業の力により、彼が安楽を与える極楽に赴かなくても、確実に悪しき存在領域を捨てて、神々の住居へと赴くであろう.

[7] 結語

46. 蓮華のような御足をした吉祥なるバドラ[師]より、葬儀に関する偉大なる教えを得て、吉祥なる『秘密集会』の体系に基づいて、この葬儀の儀礼次第が著された⁸⁵.

47. 吉祥なる『秘密集会』によっては満たされない⁸⁶行為は、吉祥なる『悪趣清浄タントラ』に依拠した儀礼行為を補充した.

[奥書]

以上、『死者を良き存在領域への差し向け方』という名の、葬儀に関する[儀軌が]完成した. これは、賢者である尊師シェーンヤサマーディヴァジラの著作である⁸⁷.

Appendix

『秘密集会タントラ』註釈文献に見られる死者蘇生のヨーガ

この Appendix では、*Mṛtasugatiniyojana* の死者蘇生儀礼の典拠となっている

⁸⁴ Tib.1 は shin tu shugs dag mthun pa yi || rlung la de ni *bskur (D1; *bkur* P1) bar bya || (P f. 29r6, D f. 38r3) 「吹き荒れる風にそれをのせるべきである(?)」と訳してある.

⁸⁵ Tib.2 はこの詩節を以下の様に訳している. dpal ldan bzang po'i zhabs kyi *padma (P2; *padmo* D1) las || thob pa'i man ngag shin tu 'dod pa ni || dpal ldan gsang ba 'dus pa las byung ba || shin tu yid 'ong cho ga byas pa ni || (P f. 33v2 - 3, D f. 34v6 - 7). 第 2 pāda の anyteṣṭeḥ, 第 3 pāda の antyeṣṭi- をそれぞれ atīṣṭeḥ, atīṣṭi- と読んだようである. また, mahopadeśam の mahā- は訳されておらず, śrīguhyasamājanītyā は意訳されている.

⁸⁶ Tib.1 は ma bstan (P f. 29r8, D f. 38r5) 「説かれていない」と意訳している.

⁸⁷ Tib.2 は奥書を以下の様に訳している. shi ba bde 'gror sbyar ba'i cho ga shin tu 'dod pa mchog tu gyur pa zhes bya ba'i ming can dpal ston nyid ting nge 'dzin rdo rje'i zhabs kyis mdzad pa rdzogs so || (P f. 33v4, D f. 34v7 - 35r1). -abhidhānam を -vidhānam と読み, antyeṣṭeḥ を atīṣṭeḥ と読んでいると考えられる(註 85 も参照). mchog tu gyur pa というサンスクリット語写本には見られない尊称を著者に付している.

Guhyasamājatantra 14.1-2 のテキストとチベット大蔵経中 *Jñānapāda* 流に配される *Guhyasamājatantra* 註釈の当該箇所への註釈部分を提示する。また、死者蘇生儀礼の手順を明確にするために、本論文の「はじめに」で提示した死者蘇生儀礼のアウトライン(1) - (5)の各段階に相当する部分を(1) - (5)で示している。

1. *Guhyasamājatantra* 14.1-2

om ru ru sphuru jvala tiṣṭha siddhalocane sarvārthasādhani svāhā. athāsyāṃ
gītamātrāyāṃ sarvasampanmanīṣiṇaḥ | tuṣṭā harṣaṃ samāpede buddhavajram
anusmaran || 1 || buddhānāṃ śāntijananī sarvakarmaprasādhani | **mṛtasamjīvanī** proktā
vajrasamayacodanī || 2 || (M_{ED} p. 60, ll. 4 - 9)

2. *Vivaraṇa* (P f. 230r4 - 8, D ff. 200r7 - 200v3)

shi ba sos par byed pa (mṛtasamjīvanī) (14.2c) zhes bya ba ni (1) spyan gyi sbyor ba
cho ga bzhin du byas la rang gi sngags dang bsgrub par bya ba'i ming dang spel zhing
yi ge gsum gyi nang du chud par bzlas la | shi ba snga ma bzhin du rang gi *snying gar
(D; *snying khar* P) bzhag nas (2) rang gi *snying ga (D; *snying kha* P) nas grub pa'i rdo
rje'i lcags kyu phyung la des shi ba de'i rnam par shes pa srid pa bar ma do'i bdag nyid
can nam skye gnas su chud pa | dri ma med pa'i mar me mi g-yo ba lta bur bkug nas
snying gi dbus der bcug la | (3) mo ha ra ti zhes bya ba'i sngags bkod nas | sngags kyi
*'od zer (P; 'od zed D) rnams kyis lus de mi snang bar byas la (4) bsgrub par bya ba de'i
ming gi yi ge dang po las bskyed pa spyan lta bur yongs su gyur par bsams la | phung po
la sogs pa gang bar byas te | de'i lus la phreng ba'i sngags 'dis phyi dang nang du bar
mtshams med par khyab par gyur par bsgom mo || (5)⁸⁸ de nas sngags las snga ma
bzhin du spros pa'i 'od zer gyi gong bu dbab pa la sogs pa byas par gyur pas shi ba 'tsho
bar byed pa yin no ||

3. *Ratnavṛkṣa* (P ff. 86v8 - 87r5, D ff. 76r - 76v2)

shi ba sos par byed pa gsungs (mṛtasamjīvanī proktā) || zhes pa ni (1) cho ga ji lta ba

⁸⁸ *Vivaraṇa* では特に灌頂に言及していないが、他の註釈書及び *Mṛtasugatiniyojana* の記述から、この段階が(5)に相当すると考えられる。

bzhin du sbyor ba byas la | ye shes lha mo'i thugs kar zla ba'i *steng du (D; *steng* P) shi ba'i ro bzhag la | (2) *de'i (D; *de* P) sngags dang bsgrub bya'i ming spel ba de nyid gsum gyi bar du chud pa bzlas pas | *lam (D; *lam* P) las byung ba'i 'od zer gyi lcags kyus shi ba de'i rnam par shes pa srid pa *bar ma do 'am (D; *bar ma dor ram* P) | yang skye gnas su *phyin (D; *byin* P) pa dri ma med pa mi g-yo bar mar me ltar gnas pa bkug nas ro *de'i (D; *da'i* P) snying gar bcug la | (3) de la spyen ma'i ming bkod nas de'i 'od zer gyis ro de mi snang bar byas nas (4) bsgrub bya de ming gi tha ma'i yi ge las bskyed pa spyen ma lta bur bsams te gang ba rnams rgyas par byas nas | de'i lus la phreng ba'i sngags kyis phyi nang gtams par bsams pas | (5) de las byung ba'i 'od zer gyis stobs dbab pa dang dbang bskur ba la sogs pa gong ma ltar byas pas | shi ba 'tsho ste *bskal pa'i (em.; *bskal ba'i* P D) bar du yang gnas so ||

4. *Pañjikā* (P ff. 272r4 - 272v3, D ff. 239r6 - 239v4)

shi ba sos par byed par gsungs (mr̥tasamjīvanī proktā) || zhes bya ba la *di skad (D; 'di P) gsungs pa yin te | (1) phra mo'i rnal 'byor gyis brtan par byas pa'i sems dang | rig pa bzlas pas kyang ji lta ba bzhin spyen gyi sbyor ba byas nas (2) rang gi snying ga las grub pa'i 'khor lo'i lcags kyu phyung nas shi ba gzhan du song ba'i rnam par shes pa shi ba'i rnam pa'i rjes su byed pa *gsal (P; *bsal* D) ba'i nor bu dmar po'i 'od can nam a'i rnam pa'i gzugs bkug nas de'i snying gar gzhus par bya'o || de yang gsungs pa |

a ni sems can thams cad kyi || rtag tu srog gyur rang phyag rgya ||
yang dag bzung nas yang dag being || srog ni bsrung ba'i *rgyu yi
(D; *rgyu'i* P) phyir ||

*zhes so (D; *ces so* P) || (3) de la mo ha ra ti snying gar bkod la de'i 'od zer rnams kyis de'i lus mi snang bar byas nas (4) de'i ming *gi (D; *gyis* P) yi ge dang po tsam 'od zer dang bcas te ji lta ba bzhin du rang gi snying gar gzhus par bya ste | spyen gyi rnam par yongs su gyur pa bsgoms nas ji lta ba bzhin du phung po dang khams dang skye mched la sogs pa byin gyis brlab pa byas nas spyen gyi sngags kyis rtag tu de'i lus po khyab par bya'o || sngags de nyid bsgrub par bya ba'i ming dang *spel (D; *sprel* P) nas bzlas so || (5) ngon bzhin du dbang bskur ba la sogs pa'i cho ga byas na shi ba yang slar rab tu sos par 'gyur ro || gang gi tshe 'chi 'dod pa'i srog srung bar 'dod pa de'i tshe 'chi bar 'dod

pa'i snying ga'i padma la ming gi yi ge'am yi ge a *bltas (D; *ltas* P) shing padma btsums
la zhags pas *bcing bar | yang na

rdo rje kha sbyar te gnas pa'i || a yig gser gyis mdog can ni ||

snying gar bsams nas logs gnyis dag || zhags pa dag gis (P; n.e. D)

bcing bar bya'o ||

N.B. Eye skip from "*bcing bar*" immediately before the verse to "*bcing bar bya'o*" in *pāda* d in the *sDe*
ge edition.

5. *Alaṃkāra* (P f.131r2 - 7, D f. 112v6 - 113r2)

'chi ba sos par byed (mr̥tasamjīvanī) ces pa'i don ni 'di yin te | (1) spyān gyi rnal 'byor
pas (2) ye shes sems dpa'i thugs ka'i sa bon gyi lcags kyus bar ma do'i srid pa'i bdag
nyid dam mngal du chud pa dri ma med pa bskyod pa med pa mi g-yo ba gnyug ma'i
mar me'i rtse mo'i rgyun dang 'dra ba'i rnam par shes pa bkug ste | shi ba de'i *snying
gar (D; *snying kar* P) bcug la (3) de la *laṃ (P; *lam* D) gyi sa bon bsgoms nas de'i 'od
zer rnams kyis de'i lus po rang bzhin gyis 'od gsal bar bya ste | (4) grub pa'i dngul chus
zangs gser du byas pa bzhin du | spyān gyi rnam par yongs su gyur par bltas la mig la
sogs pa byin gyis brlab par byas te | (5) rang gi ye shes sems dpa'i thugs ka'i sa bon gyi
'od zer las byung ba spyān gyi tshogs kyis bum pa'i bdud rtsi dang byang chub kyis sems
dang bdag nyid zhugs pas dbang bskur bas dbang bskur bar bya'o || de ltar shi ba *de
sos (D; *di bsos* P) shing rdo rje'i sku yang thob par 'gyur te thams cad mkhyen pa ma
yin pa la bsam gyis mi khyab pa'i *phyir (D; *phying* P) grub pa'i rnal 'byor pa'i byin gyis
brlab pa yin no ||

6. *Kusumāñjali* (P vol. *nyi*, ff. 3r8 - 4r3; D vol. *thi*, ff. 3r1 - 3v1)

shi ba *sos (D; *gsos* P) par byed pa (mr̥tasamjīvanī) ni shi ba'i srog kyang 'gugs par
byed pa'i phyir dang | 'chi bar 'dod pa'i srog kyang 'dzin par byed pa'i phyir ro || de la zhi
ba'i don du ji ltar rnam par snang mdzad kyis sbyor bas sbyor ba gsungs pa de bzhin du
spyān gyi sbyor bas kyang blta bar bya'o ||

yang na kham phor kha sbyar gyi nang du tsandan dkar pos padma 'dab brgyad bris te |
de'i lte ba'i rdo rje'i lte bar gnas pa'i yi ge hūṃ gi mgor bsgrub par bya ba'i ming dang

spel ba rnam par snang mdzad kyi 'byin pa'i sngags kyis bskor ro || de'i 'dab ma la spyang
gyi sngags kyis kyang bskor bar bya'o || de nas cho ga bzhin du spyang drangs pa la sogs
pa byas nas | nad pa'i sngas su tsandan gyis byugs pa'i sa gzhi'i gnas la kham phor kha
sbyar *bzhag (P; *gzag* D) ste me tog dkar pos mchod par bya'o || snga ma bzhin du
rang gi snying ga'i zla ba la de dbang bskur bar bsams nas bskul tshig dang bcas pa'i
phreng ba'i sngags khri bzla bar bya'o ||

(1) shi ba gso ba'i phyir cho ga bzhin du spyang gyi sbyor ba byas nas (2) rang gi snying
ga las grub pa'i rdo rje lcags kyu phyung ba des shi ba'i rnam par shes pa 'jig rten pha
rol *du (D; *tu* P) song ba gsal zhing dmar ba'i yi ge a'i rnam pa can nam | mar me'i rtse
mo rlung gis ma bskyod pa'i mi g-yo ba lta bu bkug la shi ba'i snying gar *gzbug (D;
bzhug P) par bya'o || (3) de la *mo ha ra ti (em.; *mo ha ra ta* P; *mo ha ra tī* D) zhes bya
ba'i snying po bkod de | de'i 'od zer gyis lus de mi snang bar byas la (4) *mo ha ra ti (P;
mo ha ra tī D) zhes brjod bzhin du spyang gyi rnam par yongs su gyur par bsams te | mig
la sogs pa dang lus la sogs pa byin gyis brlabs par byas nas (5) rang gi snying ga na
gnas pa'i ye shes kyi lha mo'i thugs ka'i zla ba la bkod pa'i phreng ba'i sngags de las
byung ba'i spyang gyi sprin rnam kyis shel gyi bum pa'i *bdud rtsis (P; *bdud rtsi'i* D)
dbang bskur ba dang | snga ma bzhin du 'od zer gyi gong bu'i dbang bskur bas dbang
bskur bar bya'o || 'chi bar 'dod pa'i srog yang dag par gzung ba'i phyir ||

'chi 'dod snying ga'i padma la || ming gi yi ge'am yi ge āḥ ||

bltas shing padma kha btsums la || padma zhags pas bcing bar bya ||

yang na |

snying gar rdo rje kha sbyar *ltor (P; *ster* D) || gnas pa'i āḥ ni gser

'od can ||

bsams nas rtse mo gnyis dag ni || zhags pa dag gis bcing bar bya ||

7. *Candraprabhā* (P f. 286r1 - 5, D f. 239v4 - 7)

shi ba gson par byed par gsungs (mr̥tasamjīvanī proktā) || *zhes bya ba (D; *zhes bya bas*
P) ni 'di skad bstan pa yin te | (1) ji lta ba bzhin du sangs rgyas spyang gyi rnal 'byor byas
la (2) rang gi *snying ga nas (D; *snying gnas* P) grub pa'i rdo rje lcags kyu phyung ste |
des shi ba'i dri za'i sems can gyi bdag nyid dam mngal du zhugs pa'i rnam par shes pa

gsal zhing rlung gis ma bskyod pa'i mar me'i me lce'i rnam pa can bkug nas de'i snying
gar bcug ste | (3) der mo ha ra ti zhes bya ba'i snying po rnam par bkod la de las byung
ba'i 'od zer gyi tshogs rnams *kyis (D; *kyi* P) de'i 'jigs pa mi snang bar byas te | (4)
snying po nyid *brjod (D; *rjod* P) cing sangs rgyas spyen gyi gzugs su yongs su gyur
par bsams la | phung po dang sbye mched dang sku dang gsung dang thugs byin gyis
brlab pa yang byas te | (5) rang gi *snying gar (D; *snying ga na* P) bzhugs pa'i ye shes
kyi lha mo'i thugs kar padma'i steng gi zla ba la bkod pa'i *phreng (D; *'phreng* P) ba'i
sngags las byung ba'i 'od zer gyi sgo las spros pa'i sangs rgyas spyen gyi tshogs rnams
kyis bum pa'i byang chub kyis sems dang bdag nyid zhugs *pas (em.; *pa'i* P D) dbang
bskur ba rnams kyis dbang bskur bar bya'o || de ltar na shi ba de gson zhing rdo rje'i sku
dang ldan par 'gyur ro ||

略 号

corr.	correction
em.	emendation
conj.	diagnostic conjecture
D1, D2	See T1 and T2 below.
n.e.	not existent
NAK	National Archives, Kathmandu
NGMCP	Nepalese-German Manuscript Cataloguing Project
NGMPP	Nepal-German Manuscript Preservation Project
Ota.	D. Suzuki (ed.) <i>The Tibetan Tripitaka, Peking Edition: Kept in the Library of the Otani University, Kyoto: Reprinted under the Supervision of the Otani University of Kyoto: Catalogue & Index</i> . Tokyo: Suzuki Research Institute, 1962. 『影印北京版西藏大藏經-大谷大学図書館蔵-大谷大学監修 西藏大藏經研究会編輯 総目録附索引』東京・鈴木学術財団, 1962.
P1, P2	See T1 and T2 below.
Tib.1	<i>Tha ma'i mchod pa'i cho ga</i> (Ota.2770 = P1, Toh.1908 = D1)

- Tib.2 *Ngan song thams cad yongs su sbyong ba'i rgyud las phyung ba spyang ma'i ngan song sbyong ba'i cho ga* (Ota.2771 = P2, Toh.1907 = D2)
- Toh. H. Ui, M. Suzuki, Y. Kanakura and T. Tada (eds.) *A Complete Catalogue of the Tibetan Buddhist Canons*. Sendai: Tohoku Imperial University, 1934. 『西藏大蔵経総目録 東北大学所蔵版』仙台・東北帝国大学, 1934.
- TSD J. S. Negi (ed.) *Tibetan-Sanskrit Dictionary*. Sarnath: Dictionary Unit, Central Institute of Higher Tibetan Studies, 1993-2005. 16 volumes.

参考文献

1. 一次資料

1.1. サンスクリット語文献

Advayavajrasaṃgraha. Edited by Shastri, Haraprasad. Baroda: Oriental Institute, 1927.

Gaekwad's Oriental Studies 40.

Ācāryakriyāsamuccaya of Jagaddarpaṇa or Darpaṇācārya. K7: Preserved in the Kyoto University Library, No. 7; K8: Preserved in the Kyoto University Library, No. 8; P1: Preserved in the Bibliothèque nationale, Paris, No. 15; P2: Preserved in the Bibliothèque nationale, Paris, No. 30; S: *Kriya-Samuccaya: A Sanskrit Manuscript from Nepal Containing a Collection of Tantric Ritual by Jagaddarpaṇa*, reproduced by L. Chandra from the Collection of Prof. Raghuvira, New Delhi, 1977.

Anteṣṭividhi of Gārgya. See Acharya 2010.

Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu. Edited by P. Pradhan, Patna: K. P. Jayaswal Research Institute, 1967. Tibetan Sanskrit Works Series 8.

Karmakāṇḍakramāvalī. See Somaśambhupaddhati.

Kriyāsaṃgrahapañjikā of Kuladatta. The *pratimādipratīṣṭhāvidhi* has been edited in Tanemura 2004b. For *devatāyoga* section see Inui (乾) 1994.

Guhyasamājatantra. M_{ED}: 松長有慶 (Matsunaga, Yukei) 校訂『秘密集会タントラ校訂梵本』大阪・東方出版, 1978.

Catuspūṭhatantra. MS NAK 1-1078 / vi. *śaivatantra* = NGMPP B26/23. The catalogue

- title is *Prakaraṇatantra* and is wrongly catalogued under śaivatantra.
- Catuspīṭhanibandha*. A commentary on the *Catuspīṭhatantra* by Bhavabhaṭṭa. MS: Kaiser Library No. 134 = NGMPP C14/11.
- Ḍākinīvajrapañjaraṭippatiḥ* of an anonymous author. Kaiser Library MS No.230 = NGMPP C26/3.
- Tantrāloka* of Abhinavagupta. M. K. Śāstrī (ed.) *Tantrāloka of Abhinavagupta with Commentary by Rājānaka Jayaratha*. Bombay and Srinagar, 1918-38. Kashmir Series of Texts and Studies 23, 28, 30, 35, 29, 41, 47, 59, 52, 57, 58.
- Niṣpannayogāvalī* of Abhayākaraḡupta. L_{ED}: Lee, Yong-hyun (ed.) *The Niṣpannayogāvalī by Abhayākaraḡupta: A New Critical Edition of the Sanskrit Text (Revised Edition)*, Seoul: Baegun Press, 2004; B_{ED}: Bhattacharyya, Benoytosh (ed.) *Niṣpannayogāvalī of Mahāpaṇḍita Abhayākaraḡupta*. Baroda: Oriental Institute, 1949. Gaekwad's Oriental Studies 109.
- Prajñāpāramitāsādhana* attributed to Asaṅga. Edited in *Sādhanaṃālā* No.159.
- Pañcākāra* of Advayaṡajra. Edited in *Advayaṡajrasaṃgraha*, pp. 41 - 43, and Mikkyō Seiten Kenkyūkai (密教聖典研究会) 1989.
- Pradīpodyotana*. A *ṭīkā* on the *Guhyasamājatantra* by Candrakīrti. C_{ED}: Ch. Chakravarti (ed.) *Guhyasamājatantrapradīpodyotanaṭīkāṡaṭkoṭivyaḡhyā* (sic), Patna: Kashi Prasad Jayaswal Research Institute, 1984. Tibetan Sanskrit Works Series 25.
- Bhramaharanāma Hevajrasādhana* of Ratnākaraśānti. I_{ED}: Isaacson, Harunaga. 2002.
- Mañjuśrīyamūlakalpa* (*Mañjuśrīmūlakalpa*). S_{ED}: T. Gaṇapati Śāstrī (ed.) *The Āryamañjuśrīmūlakalpa*. 3 volumes. Trivandrum Sanskrit Series 70, 76 and 84. Trivandrum: Superintendent Government Press, 1920 – 1925.
- Maṇḍalopāyikā* of Padmaśrīmitra. MS preserved in the Tokyo University Library No. 280 (New Number). The *antasthitikarmodeśa* chapter has been edited in Tanemura (種村) 2012b.
- Muktāvalī*. A commentary on the *Hevajratantra* by Ratnākaraśānti. MS A: NAK 4-19 = NGMPP 994/6; MS B: No. 513 (New Number) preserved in the University of Tokyo; S_{ED}: R. Sh. Tripathi and Th. S. Negi (eds.) *Hevajratantram with Muktāvalī*

- Pañjikā of Mahāpaṇḍitācārya Ratnākaraśānti*. Sarnath: Central Institute of Higher Tibetan Studies, 2001. Bibliotheca Indo-Tibetica Series 48.
- Mṛtasugatiniyojana* of Śūnyasamādhivajra. MS T: Manuscript preserved in the Tokyo University Library No. 307 (New Number), ff. 1v - 9r; MS N: Manuscript preserved in Kaiser Library, Kathmandu = NGMPP, Reel-number C47/9.
- Mṛtyuvañcanopadeśa* of Vāgīśvarakīrti. S_{ED}: Schneider, Johannes (ed.) *Vāgīśvarakīrtis Mṛtyuvañcanopadeśa, eine buddhistische Lehrschrift zur Abwehr des Todes*. Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften. Österreichischen Akademie der Wissenschaften, Philosophisch-historische Klasse, Denkschriften, 394.Band.
- Yogācārabhūmi*. Bhattacharya, Vidhushekhara (ed.) *The Yogācārabhūmi of Ācāryaśaṅga: The Sanskrit Text Compared with the Tibetan Version*, part 1. University of Calcutta, 1957.
- Yogimanoharā*. A ṭippaṇī on the *Pañcakrama* by Muniśrībhadrā. T_{ED}: Jiang, Zhongxin and Tomabechi, Toru (eds.), *The Pañcakramaṭippaṇī of Muniśrībhadrā: Introduction and Romanized Sanskrit Text*. Bern et al.: Peter Lang, 1996. Schweizerische Asiengesellschaft/Société Suisse-Asie Monographie Band/Volume 23.
- Vajrāvalī of Abhayākaragupta*. M_{ED}: Mori, Masahide (ed.) *Vajrāvalī of Abhayākaragupta*. Tring: The Institute of Buddhist Studies. Buddhica Britannica, Series Continua 11. 2 volumes.
- Vimalaprabhā*. A Commentary on the *Kālacakratāntra* by Kalkin Śrīpuṇḍarīka. S_{ED}: J. Upadhyaya (vol.1), S. Rinpoche, V. Dwivedi and S. S. Bahulkar (vols 2 and 3) (eds.) *Vimalaprabhāṭikā of Kalkin Śrīpuṇḍarīka on Śrīlaghukālacakratāntrarāja by Śrīmañjuśrīyaśas* (3 vols.). Sarnath: Central Institute of Higher Tibetan Studies, 1986 (Vol. 1), 1994 (Vols. 2 and 3). Bibliotheca Indo-Tibetica Series 11 (Vol. 1), Rare Buddhist Text Series 12 (Vol. 2) and 13 (Vol. 3).
- Vīnāśīkhatantra*. T_{ED}: Goudriaan, Teun. (ed. and trsl.) *The Vīnāśīkhatantra: A Śaiva Tantra of the Left Current*, Delhi · Varanasi · Patna · Madras: Motilal Banarsidass, 1985.

- Saptākṣarasādhana* of Advayavajra. Edited in *Sāadhanamālā*, No.251.
- Sarvatathāgatatattvasaṃgraha*. H_{ED}: Horiuchi 1974 and 1983 (Vol.1 = Horiuchi 1983, Vol.2 = Horiuchi 1974).
- Sarvadurgatipariśodhanatantra*. S_{ED} = Skorupski 1983; T_{ED} = (高橋) 1984a, 1984b, 1985a, 1985b, 1986.
- Sāadhanamālā*. Bhattacharya, Benoytosh. (ed.) *Sāadhanamālā*. Baroda: Oriental Institute, 1925. 2 volumes. (Reprinted, 1968.) Gaekwad's Oriental Series 26, 41.
- Siddhaikavīrasādhana* by an anonymous author. *Sāadhanamālā* No. 67.
- Somaśambhupaddhati* of Somaśambhu. B_{ED}: Brunner-Lacaux, Hélène (ed. and trsl.) *Somaśambhupaddhati, troisième partie: Rituels occasionnels dans la tradition śivaïte de l'Inde du Sud selon Somaśambhu II: dīkṣā, abhiṣeka, vratoddhāra, antyeṣṭi, śrāddha*. Pondichéry: Institut français d'indologie. 1997. Publications de l'institut français d'indologie No.25.III. K_{ED}: *Karmakanda-Kramavali by Sri Somashambhu*. Srinagar, 1947. Kashmir Series of Texts and Studies 73.
- Sphuṭārthā Abhidharmakośavyākhyā* of Yośomitra. Edited by Wogihara, Unrai, Tokyo: The Publishing Association of Abhidharmakośavyākhyā, 1932-1936. 3 Parts.

1.2. チベット語訳文献

- Kye rdo rje zhes bya ba'i sgrub pa'i thabs*. Translation of Advayavajra's *Hevajra-sādhana*. Ota. 2372, *rgyud 'grel*, vol. *zha*, ff. 189r2 - 204v4; Toh. 1243, *rgyud*, vol. *nya*, ff. 162r3-175r1.
- (*dpal*) *Ngan song thams cad yongs su sbyong ba'i rgyud las phyung ba spyen ma'i ngan song sbyong ba'i cho ga*. Translation by Chos kyi grags pa (Dharmakīrti) and Vairocana vajra of the *Mṛtasugatiniyojana*. Ota. 2771, *rgyud 'grel*, vol. *di* ff. 29v2 - 33v5; Toh. 1907, *rgyud*, vol. *phi*, ff. 31v4 - 35r1.
- (*'Phags pa*) *'Jam dpal gyi dkyil 'khor gyi cho ga yon tan 'byung gnas*. Translation of Arabodhi's (Ārya-) *Mañjuśrīmaṇḍalavidhiguṇasaṃbhava*. Ota. 3409, *rgyud 'grel*, vol. *i*, ff. 99r3 - 125r8; Toh. 2582, *rgyud*, vol. *ngu*, ff. 83r1 - 106r3.
- (*'Phags pa*) *'Jam dpal gyi mtshan yang dag par brjod pa'i sgrub thabs*. Translation of Agrabodhi's (Ārya-) *mañjuśrīnāmasaṃgītisāadhanopāyikā*. Ota. 3406, *rgyud 'grel*,

- vol. i, ff. 72r7 - 85r1; Toh. 2579, *rgyud*, vol. *ngu*, ff. 59r4 - 70v2.
- (*'Phags pa*) *'Jam dpal gyi mtshan yang dag par brjod pa'i gsang ba dang ldan pa'i sgrub pa'i thabs kyi 'grel pa ye shes gsal ba zhes bya ba*. Translation of Smṛtijānakīrti's (Ārya-)Mañjuśrīnāmasaṃgītiguhyāpannopāyikāvr̥ttijñānadīpa. Ota. 3411, *rgyud 'grel*, vol. i, ff. 127r1 - 178r3; Toh. 2584, *rgyud*, vol. *ngu*, ff. 107v1 - 150v1.
- Tha ma'i mchod pa'i cho ga*. Translation by Phyogs dbang dga' byed (*Digīśanandana) and Prajñākīrti of the *Mṛtasugatiniyojana* of Śūnyasamādhivajra (T1). Ota. 2770, *rgyud 'grel*, vol. *di*, ff. 25v3 - 29v2 (P1); Toh. 1908, *rgyud*, vol. *phi*, ff. 35r1 - 38r6. (D1). The sde ge edition and the Peking edition present *a nta ma ha bi dhi* and *a nte śta bhi dhi* as its Sanskrit titles respectively. The latter might be a corruption of *a ntye ṣṭi bi dhi* (*antyeṣṭividhī*).
- Rin po che'i ljon zhing zhes bya ba gsang ba 'dus pa'i 'grel pa* (**Ratnavṛkṣanāma Guhyasamājavṛtti*). Translation of Cilupa's (or Celuka's) commentary on the *Guhyasamājatantra*. Ota. 2709, *rgyud 'grel*, vol. *chi*, ff. 1v1 - 162v1; Toh. 1846, *rgyud*, vol. *nyi*, ff. 1 - 145r7.
- Rim pa gnyis pa'i de kho na nyid bsgom pa zhes bya ba'i zhal gyi lung*. Translation of Buddhaśrījñāna's *Dvikramatattvabhāvanānāma Mukhāgama*. Ota. 2716, *rgyud 'grel*, vol. *ti*, ff. 1r1 - 20r5; Toh. 1853, *rgyud*, vol. *di*, ff. 1v - 17v.
- Legs par grub par byed pa'i rgyud chen po las sgrub pa'i thabs rim par phye ba*. Translation of *Susiddhikaramahātantrasāadhanopāyikapāṭala* (*Susiddhikara*). Ota. 431, *rgyud*, vol. *tsha*, ff. 230r8 - 284v7; Toh. 807, *rgyud*, vol. *wa*, ff. 168r1 - 222v7.
- gSang ldan gyi dka' 'grel don bsdu sgron ma*. Translation of the *Guhyāpannapañjikā-piṇḍārthapradīpa* of an anonymous author. Ota. 3420, *rgyud 'grel*, vol. *ku*, ff. 9r1 - 38v6; Toh. 2593, *rgyud*, vol. *cu*, ff. 7r7 - 32v1.
- gSang ba 'dus pa'i rgyan* (*Guhyasamājālaṃkāra*). Translation of the commentary by Dri med sbas pa (*Vimalagupta) on the *Guhyasamājatantra*. Ota. 2711, *rgyud 'grel*, vol. *ji*, ff. 1v1 - 177r6; Toh. 1848, *rgyud*, vol. *ti*, ff. 1 - 152v5.
- gSang ba 'dus pa'i rgyud kyi dka' 'grel* (*Guhyasamājatantrapañjikā*). Translation of the commentary by rGyal bas byin (*Jinadatta) on the *Guhyasamājatantra*. Ota. 2710,

rgyud 'grel, vol. *chi*, ff. 162v1 - 364r7; Toh. 1847, *rgyud*, vol. *nyi*, ff. 145r7 - 318r7.

gSang ba 'dus pa'i rgyud kyi 'grel pa (*Guhyasamājatantravivaraṇa*). Translation of Thagana's commentary on the *Guhyasamājatantra*. Ota. 2708, *rgyud 'grel*, vol. *ci*, ff. 185r7 - 280r5; Toh. 1845, *rgyud*, vol. *ji*, ff. 161v1 - 244r7.

gSang ba 'dus pa rgyud kyi rgyal po'i bshad pa zla ba'i 'od zer (*Guhyasamājatantra-rājaṭikā Candraprabhā*). Translation of the commentary by Rab tu dga' ba'i 'byung gnas go cha (*Pramuditākaravarman) on the *Guhyasamājatantra*. Ota. 2715, *rgyud 'grel*, vol. *nyi*, ff. 147r6 - 380r8; Toh. 1852, *rgyud*, vol. *thi*, ff. 120r4 - 313r7.

gSang ba 'dus pa'i sgrub pa'i thabs dngos grub 'byung ba'i gter. Translation of Vitapāda's *Guhyasamājasādhanaśiddhisāmbhavanidhi*. Ota. 2737, *rgyud 'grel*, vol. *thi*, ff. 1v1 - 83r4; Toh. 1874, *rgyud*, vol. *pi*, ff. 1 - 69v6.

gSang ba 'dus pa'i bshad sbyar snyim pa'i me tog (**Guhyasamājanibandha Kusumāñjali*). Translation of Ratnākaraśānti's commentary on the *Guhyasamājatantra*. Ota. 2714, *rgyud 'grel*, vol. *ji*, f. 233v8 - vol. *nyi*, f. 147r6; Toh. 1851, *rgyud*, vol. *ti*, f. 202v1 - vol. *thi*, f. 120r4.

*gSang ba 'dus pa'i ro bsreg pa'i cho ga*⁸⁹ attributed to Āryadeva ('Phags pa lha). Ota. 2672, *rgyud 'grel*, vol. *gi*, ff. 132v8 - 134v3; Toh. 1807, *rgyud*, vol. *ngi*, ff. 117r2 - 118v1.

1.3. 漢訳文献

蘇悉地羯羅經. Chinese Translation of the *Susiddhikaramahātantrasādhana-pāyikapaṭala*. Taisho 893. Vol.18.

2. 二次文献

2.1. 和文

乾仁志. 1994. 「Kriyāsaṃgraha の本尊瑜伽：梵文テキスト(下)」『密教文化研究所紀要』7, pp. 91 - 112.

川崎一洋. 2003. 「インド密教における葬送儀礼の一考察：『悪趣清浄タントラ』に

⁸⁹ This title is given in the colophon of the translation.

- 基づく荼毘護摩儀軌を中心に」『仏教史学研究』46-2, pp. 1 - 16.
- 桜井宗信. 1996. 『後期インド密教儀礼研究 — 後期インド密教の灌頂次第 —』京都・法蔵館.
- 桜井宗信. 2006. 「Mañjuśrīmitra の説く死者儀礼」『密教学研究』38, pp. 1 - 14.
- 桜井宗信. 2007. 「文殊具密流の伝える死者儀礼」大正大学真言学豊山研究室加藤精一博士古稀記念論文集刊行会編『真言密教と日本文化 — 加藤精一博士古稀記念論文集』東京・ノンブル社, pp. 159 - 181.
- 桜井宗信. 2009. 「Jñānapāda 流の伝える死者蘇生儀礼 — Vitapāda の所説を中心に —」『現代密教』20, pp. 197 - 210.
- 桜井宗信. 2010. 「聖者流の伝える荼毘儀礼 — ḥPhags pa lha (*Āryadeva) に帰された著作を中心に —」『現代密教』21, pp. 67 - 79.
- 高橋尚夫. 1984a. 「Sarvadurgatipariśodhanatantra (二) — 梵文テキストと和訳 —」大正大学真言学智山研究室編『那須政隆博士 米寿記念佛教思想論集』成田・成田山新勝寺, pp. 46 - 77.
- 高橋尚夫. 1984b. 「Sarvadurgatipariśodhanatantra (三) — 校訂と和訳 —」『豊山学報』28・29 合併号, pp. 468 - 430.
- 高橋尚夫. 1985a. 「Sarvadurgatipariśodhanatantra (一) — 梵文テキストと和訳 —」壬生台舜博士頌寿記念論文集刊行会編『壬生台舜博士頌寿記念 仏教の歴史と思想』東京・大蔵出版, pp. 960 - 936.
- 高橋尚夫. 1985b. 「Sarvadurgatipariśodhanatantra (四) — 校訂と和訳 —」『豊山学報』30, pp. 226 - 194.
- 高橋尚夫. 1986. 「Sarvadurgatipariśodhanatantra (五) — 校訂と和訳 —」『豊山学報』31, pp. 118 - 102.
- 種村隆元. 2004a. 「インド密教の葬儀 — Śūnyasamādhivajra 作 Mr̥tasugatiniyojana について —」『死生学研究』2004 年秋号, 2004, pp. 349 - 328 (pp. (26) - (47)).
- 種村隆元. 2012a. 「Padmaśrīmitra 作 Maṇḍalopāyikā の規定する葬送儀礼について」『印度学仏教学研究』60-2, pp. 1038 - 1033.
- 種村隆元. 2012b. 「Padmaśrīmitra 作 Maṇḍalopāyikā の Antasthitikarmodeśa — Preliminary Edition 及び試訳 —」『現代密教』23, pp. 103 - 121.
- 種村隆元. 2013. 「Śūnyasamādhivajra 著作の葬儀マニュアル Mr̥tasugatiniyojana: サ

ンスクリット語校訂テキストおよび註』『東洋文化研究所紀要』163, pp. 136 - 110.

辻直四郎. 1977. 「古代インドの葬送儀式」『ヴェーダ学論集』東京・岩波書店.

堀内寛仁. 1974. 『梵藏漢対照 初会金剛頂経の研究 梵本校訂篇 下 — 遍調伏品・義成就品・教理分 —』高野山・密教文化研究所.

堀内寛仁. 1983. 『梵藏漢対照 初会金剛頂経の研究 梵本校訂篇 上 — 金剛界品・降三世品 —』高野山・密教文化研究所, 1983.

密教聖典研究会. 1989. 「アドヴァヤヴァジュラ著作集 — 梵文テキスト・和訳(2) —」『大正大学総合佛教研究所年報』11, pp. 259 - 200.

ロルフ・ギーブル (Rolf Giebel). 1993. 「『拔濟苦難陀羅尼經』雜考」『東方学』86, pp. 156 - 145.

2.2. 欧文

Acharya, Diwakar. 2010. "The Anteṣṭividhi: A Manual on the Last Rite of the Lakulīśa Pāśupatas". *Journal Asiatique* 298.1, pp. 133 - 156.

Bhattacharyya, Benoytosh. 1958. *The Indian Buddhist Iconography: Mainly Based on the Sādhnamālā*. Calcutta: Firma K. L. Mukhopadhyay. Second Edition.

Giebel, Rolf W. 2001. (trsl.) *Two Esoteric Sutras: The Adamantine Pinnacle Sutra. The Susiddhikara Sutra. Translated from the Chinese (Taishō Volume 18, Numbers 865, 893)*. Berkeley: Numata Center for Buddhist Translation and Research. BDK English Tripiṭaka 29-II, 30 II.

Isaacson, Harunaga. 2002. "Ratnākaraśānti's Bhramaharanāma Hevajrasādhana: Critical Edition (Studies in Ratnākaraśānti's tantric works III)." *Journal of the International College for Advanced Buddhist Studies* (国際仏教学大学院大学紀要) 5, pp. 80 - 55.

Isaacson, Harunaga. 2007. "First Yoga: A Commentary on the ādiyoga section of Ratnākaraśānti's Bhramahara (Studies in Ratnākaraśānti's Tantric Works IV)." In: B. Kellner, H. Krasser, H. Lasic, M. T. Much, and H. Tauscher (eds.) *Pramāṇakīrtiḥ: Papers Dedicated to Ernst Steinkellner on the Occasion of His 70th Birthday*. Wien: Arbeitskreis für tibetische und buddhistische Studien, Universität

- Wien, 2007, pp. 285 - 314. Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde 70.1.
- Skorupski, Tadeusz. 1983. *The Sarvadurgatipariśodhana Tantra, Elimination of All Evil Destinies: Sanskrit and Tibetan Texts with Introduction, English Translation and Notes*. Delhi, Varanasi, Patna / Motilal Banarsidass.
- Tanemura, Ryugen. 2004b. *Kuladatta's Kriyāsaṃgrahapañjikā: Critical Edition and Annotated Translation of Selected Sections*, Groningen: Egbert Forsten. Groningen Oriental Studies 19.
- Tanemura, Ryugen. 2007. "Mṛtasugatiniyojana: A Manual of the Indian Buddhist Tantric Funeral." *Newsletter of the NGMCP*, No.4, pp. 2 - 6.
- Tomabechi, Toru. 2007. "The Extraction of Mantra (mantroddhāra) in the Sarvabuddhasamāyogatantra." In: B. Kellner, H. Krasser, H. Lasic, M. T. Much, and H. Tauscher (eds.) *Pramāṇakīrtiḥ: Papers Dedicated to Ernst Steinkellner on the Occasion of His 70th Birthday*, Part 2. Wien: Arbeitskreis für tibetische und buddhistische Studien, Universität Wien, pp. 903 - 923. Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde 70.2.
- Wayman, Alex. 1973. *The Buddhist Tantras: Light on Indo-Tibetan Esotericism*. New York: Samuel Weiser.
- Yagi, Toru. 1994. "A Note on bhojya- and bhakṣya-". In: Ikari, Yasuke (ed.) *A Study of the Nīlamata: Aspects of Hinduism in Ancient Kashmir*. Kyoto: Institute for Research in Humanities, Kyoto University, pp. 377 - 397.

*本論文の執筆にあたり、永ノ尾信悟教授による『CARD：ヒンドゥー儀礼研究のための基礎資料』(<http://card.ioc.u-tokyo.ac.jp/>)を利用して頂きました。

*本発表は平成24年度科学研究費補助金基盤研究(C)「インド密教における葬儀の文献学的研究」(課題番号22520053, 研究代表者：種村隆元)の成果の一部である。

大正大学綜合佛教研究所研究員

Research Fellow

The Institute for Comprehensive Studies of Buddhism

Taisho University

Tokyo, Japan